

思い出す事など

夏目漱石

青空文庫

ようやくの事でまた病院まで帰つて来た。思い出すとここで暑
 い朝夕あさゆうを送つたのももう三カ月の昔になる。その頃は二階ひさしの廂
 から六尺に余るほどの長い葭簀よしずを日除ひよけに差し出して、熱ほてりの強い
 縁側えんがわを幾分いくぶんか暗くしてあつた。その縁側えんがわには是公ぜこうから貰かえつた楓
 の盆ぼん栽さいと、時々人の見舞みまひに持つて来てくれる草花などを置いて、
 退屈しゆも凌しのぎ暑まぎさも紛まぎらしていた。向むこうに見える高い宿屋しゆくやの物干ものほしに
 真ま裸つぱだかの男おとこが二人出て、日盛ひさかりを事ことともせず、欄干らんかんの上うへを危あぶ
 なく渡わたつたり、または細長い横木よこぎの上にわざと仰向あおむけに寝ねたりし

て、ふざけまわる様子を見て自分もいつか一度はもう一遍あんな
遅たくましい体格になつて見たいと羨うらやんだ事もあつた。今はすべてが過
去に化してしまつた。再び眼の前に現れぬと云う不ふたしか慥な点にお
いて、夢と同じくはかない過去である。

病院を出る時の余は医師の勧めに従つて転地する覚悟はあつた。
けれども、転地先で再度やまいの病に罹かかつて、寝たまま東京へ戻つて来
ようとは思わなかつた。東京へ戻つてもすぐ自分の家の門は潜くぐ
ずに釣つりだい台に乗つたまま、また当時の病院に落ちつく運命になろ
うとはなおさら思いがけなかつた。

帰る日は立つ修善寺しゆぜんじも雨、着く東京も雨であつた。扶たすけられ
て汽車を下りるときわざわざ出迎えてくれた人の顔は半分も眼に

入らなかつた。目礼もくれいをする事のできたのはその中の二三うちに過ぎなかつた。思うほどの会釈えしやくもならないうちに余は早く釣台の上よこたに横よこたえられていた。黄昏たそがれの雨を防ぐために釣台には桐油とうゆを掛けた。余は坑あなの底に寝かされたような心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲うつ雨の音と、釣台に付添うて来るらしい人の声が微かすかながらとぎれとぎれに聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。汽車の中で森もり成なりさんが枕まくらもともとの信玄袋しんげんぶくろの口に挿さし込んでくれた大きな野菊の枝は、降りる混雑の際に折れてしまつたろう。

釣台に野菊も見えぬ桐油哉かな

これはその時の光景を後から十七字にちぢめたものである。余

はこの釣台に乗ったまま病院の二階へ昇き上げられて、三カ月前に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘖せた手足を延べた。雨の音の多い静かな夜であつた。余の病室のある棟には患者が三四名しかいないので、人声も自然絶え勝に、秋は修善寺よりもかえつてひっそりしていた。

この静かな宵を心地よく白い毛布の中に二時間ほど送つた時、余は看護婦から二通の電報を受取つた。一通を開けて見ると「無事御帰京を祝す」と書いてあつた。そうしてその差出人は満洲にいる中村是公なかむらぎこうであつた。他の一通を開けて見ると、やはり無事御帰京を祝すと云う文句で、前のと一字の相違もなかつた。余は平凡ながらこの暗合あんごうを面白く眺めつつ、誰が打つてくれたのだ

ろうと考えて差出人の名前を見た。ところがステトとあるばかりでいつこうに要領を得なかった。ただかけた局が名古屋とあるの
 でようやく判断がついた。ステトと云うのは、鈴木禎次と鈴木時
 子の頭文字を組み合わせたもので、妻の妹とその夫の事であつ
 た。余は二ツの電報を折り重ねて、明朝また来るべき妻の顔を見
 たら、まずこの話をしようかと思ひ定めた。

病室は畳も青かつた。襖も張り易えてあつた。壁も新に塗つた
 ばかりであつた。万居心よく整つていた。杉本副院長が再度修善
 寺へ診察に来た時、畳替をして待つていますと妻に云い置か
 れた言葉をすぐに思ひ出したほど奇麗である。その約束の日から
 指を折つて勘定して見ると、すでに十六七日目になる。青い

畳もだいぶ久しく人を待ったらしい。

思いけりすでに幾夜のいくよ蟋きりぎりす蟀蟀

その夜から余は当分またこの病院を第二の家とする事にした。

二

病院に帰り着いた十一日の晩、回診の後藤さんにこの頃院長の御病気はどうですかと聞いたたら、ええひとしきりはだいぶ好い方でしたが、近来また少し寒くなつたものですか……と云う答だつたので、余はどうぞ御逢おあいの節よろは宜しくと挨拶あいさつした。その晩はそれぎり何の気もつかずに寝てしまった。すると明あくるひ日の朝妻さい

が来て枕元に坐るすわや否や、実はあなたに隠しておりましたが長なが与よさんは先せん月げつ五日いつかに亡なくなられました。葬式ひがしには東ひがしさんに代理ひがしを頼たのみました。悪わるくなつたのは八月末ちようどあなたの危き篤とくだつた時分ときですと云う。余はこの時始めて附つき添そいのものが、院長の訃ふをことさらに秘して、余に告げなかつた事と、またその告げなかつた意味とを悟つた。そうして生き残る自分やら、死んだ院長やらをとかくに比較して、しばらくは茫ぼう然ぜんとしたまま黙もくつていた。

院長は今年の春から具合が悪かつたので、この前ぜん入院した時にも六週間の間ついで顔を見合せた事がなかつた。余の病氣よしの由よしを聞いて、それは残念だ、自分が健康でさえあれば治療に尽力して上げるのにと云う言ことづつて伝つてがあつた。その後ごも副院長を通じて、よ

ろしくと云う言伝ことづてが時々あつた。

修善寺しゆぜんじで病気がぶり返して、社から見舞のため森成もりなりさんを

特別に頼んでくれた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云っているその晩に、院長はわざわざ直接森成さんに電報を打つて、できるだけ余の便宜はかを計らつてくれた。その文句は寝ている余の目には無論触れなかつた。けれども枕元せつちにいる雪鳥ゆきどり君くんから聞いたその文句の音おんだけは、いまだに好意の記憶と

して余の耳に残っている。それは当分その地に留とどまり、充分看護に心を尽くすべしとか云う、森成さんに取つてはずいぶん厳おごかに聞える命令的なものであつた。

院長の容態ようたいが悪くなつたのは余の危篤おちいに陥つたのとほぼ同時

だそうである。余が鮮血を多量に吐はいて傍ぼうじん人からとうてい回復の見込がないように思われた二三日後あと、森成さんが病院の用事だからと云つて、ちよつと東京へ歸つたのは、生前に一度院長に会うため、それから十日ほど経たつて、また病院の用事ができて二度東京へ戻つたのは院長の葬式に列するためであつたそうである。

当初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をしてくれた院長はかくのごとくしだいに死に近づきつつある間に、余は不思議にも命の幅はばの縮ちぢまつてほとんど絹糸のごとく細くなつた上を、ようやく無難に通とり越した。院長の死が一基の墓標で永く確たしかめられたとき、辛抱強く骨の上に絡からみついていてくれた余の命の根は、辛かろうじて冷たい骨の周囲に、血の通う新しい細胞を営み初めた。

院長の墓の前に供えられる花が、幾度か枯れ、幾度か代つて、
 萩、桔梗、女郎花から白菊と黄菊に秋を進んで来た一カ月余
 の後、余はまたその一カ月余の間に盛返し得るほどの血潮を皮下
 に盛得て、再び院長の建てたこの胃腸病院に帰つて来た。そうし
 てその間いまだかつて院長の死んだと云う事を知らなかつた。帰
 る明る朝妻が来て実はこれこれと話をするまで、院長は余の病
 気の経過を東京にいて承知しているものと信じていた。そうして
 回復の上病院を出たら礼にでも行こうと思つていた。もし病院で
 会えたら篤く謝意でも述べようと思つていた。

逝く人に留まる人に来る雁

考えると余が無事に東京まで帰れたのは天幸である。こんな

るのが当り前のように思うのは、いまだに生きているからの悪^{わるど}
度胸^{きよう}に過ぎない。生き延びた自分だけを頭に置かず、命の綱
を踏^ふみ外^{はず}した人の有様も思い浮べて、幸福な自分と照らし合せて
見ないと、わがありがたさも分らない、人の気の毒さも分らない。
ただ一羽^く来る夜ありけり月の雁^{かり}

三

ジェームス教授の訃^ふに接したのは長与院長の死を耳にした明^{あくる}
日^ひの朝である。新着の外国雑誌を手にして、五六頁^{ページ}繰って行く
うちに、ふと教授の名前が眼にとまったので、また新しい著書

でも公おおやけにしたのか知らんと思ひながら読んで見ると、意外にもそれが永えい眠みんの報道であつた。その雑誌は九月初めのもので、項中には去る日曜日に六十九歳をもつて逝ゆかるとあるから、指を折つて勘かんじよう定じようして見ると、ちようど院長の容ようだい体たいがしだいに悪い方はたへ傾かたいて、傍はたのものが昼ちゆうやまゆ夜ひそ眉まゆを顰ひそめてゐる頃である。また余が多量の血を一度に失つて、死生しせいの境さかいに彷徨ほうかうしてゐた頃である。思うに教授の呼息いきを引き取つたのは、おそらく余の命が、瘠やせこけた手頸てくびに、有るとも無いとも片付かない脈を打たして、看護の人をはらはらさせていた日であろう。

教授の最後の著書「多元的宇宙」を読み出したのは今年の夏の事である。修善寺しゆぜんじへ立つとき、向むこうへ持つて行つて読み残した分

を片付けようと思つて、それを五六巻の書物とともに鞆かばんの中に入れた。ところが着いた明あくるひ日ひから心持が悪くて、出歩く事もならない始末になつた。けれども宿の二階に寝ね転ころびながら、一いち日にち二ふ日つは少しずつでも前の続きを読む事ができた。無論病勢の募つるに伴つれて読書は全く廃よさなければならなくなつたので、教授の死ぬ日まで教授の書を再び手に取る機会はなかつた。

病びょう牀しょう

病びょう牀しょうにありながら、三たび教授の多元的宇宙を取り上げたのは、教授が死んでから幾い日つかめ目めになるだろう。今から顧みると當時の余は恐ろしく衰弱していた。仰あ向むけに寝て、両方の肘ひじを蒲団ふとんに支えて、あのくらいの本を持ち応こたえているのに、ずいぶん骨が折れた。五分と経たたないうちに、貧血の結果手が麻痺しびれるので、

持ち直して見たり、甲を撫なでて見たりした。けれども頭は比較的
 疲れていなかつたと見えて、書いてある事は苦くもなく会得えとくができ
 た。頭だけはもう使えるなど云う自信の出たのは大吐血以後この
 時はじめが始はじめてであつた。嬉うれしいので、妻さいを呼んで、身からだ体の割に頭は丈
 夫なものだねと云つて訳を話すと、妻がいつたいあなたの頭は丈
 夫過ぎます。あの危篤あふなかつた二三日の間などは取り扱にくい悪くて大
 変弱らせられましたと答えた。

多元的宇宙は約半分ほど残つていたのを、三日ばかりで面白く
 読おみ了わつた。ことに文学者たる自分の立場から見て、教授が何事
 によらず具体的の事実を土台として、類アナロジ推イで哲学の領分に切
 り込んで行く所を面白く読おみ了わつた。余はあながちに弁ダイアレク証チツ

法クを嫌きらうものではない。また妄みだりに理インテレクチュアリズム知知主主義義を厭いとを厭いといも
 しない。ただ自分の平生文学上に抱いだっている意見と、教授の哲学
 について主張するところの考とが、親しい気脈を通じて彼此相倚ひしあいよ
 るような心持がしたのを愉快に思ったのである。ことに教授が仏フ
 蘭西ランスの学者ベルグソンの説を紹介する辺あたりを、坂に車を転がすよ
 うな勢いきおいで馳かけ抜けたのは、まだ血液の充分に通いもせぬ余の頭か
 取つて、どのくらい嬉うれしかったか分らない。余が教授の文章にい
 たく推服したのはこの時である。

今でも覚えている。一間ひとまおいて隣となにいる東ひがしくん君くんをわざわざ枕まくら
 元へ呼んで、ジエームスは実に能のうぶんか文家だかと教えるように云つて
 聞かした。その時東君は別にこれという明めいりよう瞭りょうな答をしなかつ

たので、余は、君、西洋人の書物を読んで、この人の流暢りゆうちようだとか、あの人の細緻さいちだとか、すべて特色のあるところがその書きぶりで、読みながら解るかいと失敬な事を問ただい糺ただした。

教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小説家で、非常に難なんじ澁ゆうな文章を書く男である。ヘンリーは哲学のような小説を書き、ウィリアムは小説のような哲学を書く、と世間で云われているらしいヘンリーは読みづらく、またそのくらい教授は読みやすく明快なのである。——病中の日記を検しらべて見ると九月二十三日の部に、「午前ジエームスを読みよ了おわる。好い本を読んだと思う」と覚おぼ束つかない文字もんじで認しためてある。名前や標題だまに欺だまされて下らない本を読んだ時ほど残念な事はない。この日記は正にこの裏を云った

ものである。

余の病氣について治療上いろいろ好意を表してくれた長なが与よびよう

病院いんちよう長ちようは、余の知らない間にいつか死んでいた。余の病中に、

空漠くうぼくなる余の頭に陸離りくりの光彩を抛なげ込こんでくれたジエームス教

授も余の知らない間にいつか死んでいた。二人に謝すべき余はただ一人生き残っている。

菊の雨われかんに閑やまぬなある病哉

菊の色縁えんに未いまだしこゝろ此あ晨した

(ジエームス教授の哲学思想が、文学の方面より見て、どう面白いかここに詳説する余地がないのは余の遺憾いかんとするところである。また教授の深く推賞したベルグソンの著書

のうち第一巻は昨今ようやく英訳になってゾンネンシヤインから出版された。その標題は Time and Free Will (時と自由意思) と名づけてある。著者の立場は無論故教授と同じく反理知派である。)

四

病^{やまい}の重^{おも}かつた時は、固^{もと}よりその日その日に生きていた。そうしてその日その日に変^かつて行^いつた。自分にもわが心の水のように流^{なが}れ去^きる様^{よう}がよく分^わつた。自^じ白^{はく}すれば雲^{くも}と同^{おな}じくかつ去^きりか^きつ来^{きた}るわが脳^{のうり}裡^りの現象^{げんじょう}は、極^{きわ}めて平凡^{へいべん}なものであつた。それも自^じ覚^{かく}して

いた。生涯しやうがいに一度か二度の大患に相応するほどの深さも厚さもない経験けいけんを、恥はじとも思わず無邪氣に重ねつつ移つて行くうちに、それでも他日の参考に日ごとの心を日ごとに書いておく事ができたならと思ひ出した。その時の余は無論手が利きかなかつた。しかも日は容易に暮れ容易に明けた。そうして余の頭を掠かすめて去さる心の波紋はもんは、随したがつて起おこるかと思えば随したがつて消えてしまつた。余は薄ぼけて微かすかに遠かすきに行くわが記憶の影を眺めては、寝ながらそれを呼び返したいような心持がした。ミュンステルベルグと云う学者の家に賊が入つた引ひきあいで、他日彼が法ほうてい庭へ呼び出されたと云う、彼の陳述はほとんど事實に相違する事ばかりであつたと云う話がある。正確を旨むねとする几帳面きちやうめんな学者の記憶でも、記憶はこ

れほどに不慥ふたしかなものである。「思い出す事など」の中に思い出す事が、日を経ふれば経るに従つて色彩を失うのはもちろんである。わが手の利きかぬ先にわが失えるものはすでに多い。わが手筆を持つうつつの力を得てより逸いつするものまた少からずと云つても嘘うそにはならない。わが病気の経過と、病気の経過に伴つれて起る内面の生活とを、不秩序ながら断片的にも叙しておきたいと思ひ立つたのはこれがためである。友人のうちには、もうそれほど好くなつたかと喜んでくれたものもある。あるいはまたあんな軽かるはずみ拳こぶしをやり損そこなわなければいいかと心配してくれたものもある。

その中で一番苦にがい顔をしたのは池辺三山君いけべさんざんくんであつた。余が原稿を書いたと聞くや否や、たちまち余計な事だと叱りつけた。し

かもその声はもつとも無愛想ぶあいそうな声であつた。医者いしやの許可を得たのだから、普通の人の退屈たいくつ凌しのぎぐらいなところと見たらよからうと余は弁解した。医者いしやの許可もさる事だが、友人ともの許可を得なければいかんと云うのが三山君さんざんの挨拶あいさつであつた。それから二三日して三山君さんざんが宮本博士みやもとに会つてこの話をするはなと、博士はかせは、なるほど退屈たいくつをすると胃いに酸さんが湧わく恐れがあるからかえつて悪いだらうと調停てうていしてくれたので、余はようやく助たすかつた。

その時余は三山君に、

遺却新詩無処尋。 ※。

斜陽滿径照僧遠。

黄葉一村蔵寺深。

懸偈壁間焚仏意。

見雲天上抱琴心。

人間至楽江湖老。犬吠鷄鳴共好音。

と云う詩を遺つた。巧拙は論外として、病院にいる余が窓から寺を望む訳もなし、また室内に琴を置く必要もないから、この詩は全くの実況に反しているには違ないが、ただ当時の余の心持を咏じたものとしてはすこぶる恰好である。宮本博士が退屈をすと酸がたまると云つたごとく、忙殺されて酸が出過ぎる事も、余は親しく経験している。詮ずるところ、人間は閑適の境に立たなくては不幸だと思つたので、その閑適をしばらくなりとも貪り得る今の身の嬉しさが、この五十六字に形を変じたのである。

もつとも趣から云えばまことに古い趣である。何の奇もなく、

何の新もないと云つてもよい。實際ゴルキーでも、アンドレーフでも、イブセンでもシヨウでもない。その代りこの趣は彼ら作家のいまだかつて知らざる興味に属している。また彼らのけつして与^{あず}からざる境地に存している。現^{げん}今^{こん}の吾^{われ}らが苦しい実生活に取り巻かれるごとく、現今の吾等が苦しい文学に取りつかれるのも、やむをえざる悲しき事実ではあるが、いわゆる「現代的氣風」に煽^{あお}られて、三百六十五日の間、傍^{わきめ}目もふらず、しかく人世を觀^{かん}じたら、人世は定めし窮屈でかつ殺風景なものだろう。たまにはこんな古風の趣がかえつて一段の新^{しん}意^いを吾らの内面生活上に放射するかも知れない。余は病^{やまい}に因^よつてこの陳腐^{ちんぷ}な幸福と爛^{らん}熟^{じゆく}な寛^くつろぎを得て、初めて洋行から帰つて平凡な米の飯に向つた時のよ

うな心持がした。

「思い出す事など」は忘れるから思い出すのである。ようやく生き残つて東京に帰つた余は、病に因つて纒わざかに享うけえたこの長閑のどかな心持を早くも失わんとしつゝある。まだ床とこを離れるほどに足腰が利きかないうちに、三山君に遺つた詩が、すでにこの太平の趣をうたうべき最後の作ではなからうかと、自分ながら掛念けねんしているくらいである。「思い出す事など」は平凡で低調な個人の病中における述じゆつかい懐かいと叙事に過ぎないが、その中うちにはこの陳腐ちんぷながら払ふ底ていな趣おもむきが、珍めづらしくだ**い**ぶ這入はいつて来るつもりであるから、余は早く思い出して、早く書いて、そうして今の新しい人々との苦しい人々と共に、この古い香かおりを懐なつかしみたいと思う。

五

修善寺しゆぜんじにいる間は仰向あおもむけに寝たままよく俳句を作つては、それを日記の中に記つけ込こんだ。時々は面倒ひようそくな平ひ仄よくを合あわして漢詩みさえ作あつて見た。そうしてその漢詩も一つ残あらず未定稿みていこうとして日記の中に書かきつけた。

余は年来俳句うたに疎うとくなりまさつた者である。漢詩に至いたつては、ほとんど当初からの門外漢と云つてもいい。詩にせよ句にせよ、病中にでき上あつたものが、病中の本人にはどれほど得意であつても、それが専門家の眼に整とつて（ことに現代的に整とつて）映あると

は無論思わない。

けれども余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身から云うと、全くその出来不出来に關係しないのである。平生へいぜいはい

かに心持の好くない時でも、いやしくも塵事じんじに堪え得るだけの健

康をもつていと自信する以上、またもつていと人から認めら

れる以上、われは常住じょうじゅう日夜共にせいぞんきようそうり生存競争裏うらに立つ悪戦の

人である。仏語ぶつごで形容すれば絶えず火宅かたくの苦を受けて、夢の中で

さえいらいらしている。時には人から勧められる事もあり、たま

には自ら進む事みづかもあつて、ふと十七字を並べて見たりまたは起きしよ

承転結うてんけつの四句ぐらい組み合わせないとも限らないけれどもいつ

もどこかに間隙すきがあるような心持がして、隈くまも残さず心ひを引き包くる

んで、詩と句の中に放り込む事ができない。それは歡樂を嫉む実生活の鬼の影が風流に纏るまつわためかも知れず、または句に熱し詩に狂するのあまり、かえつて句と詩に翻弄ほんろうされて、いらいらすまじき風流にいらいらする結果かも知れないが、それではいくら佳句くこうしと好詩こうしができたにしても、贏かち得うる当人の愉快はただ二三同好こうの評判だけで、その評判を差し引くと、後あとに残るものは多量の不安と苦痛に過ぎない事に帰着してしまう。

ところが病氣をするとだいぶ趣が違つて来る。病氣の時には自分ひとが一步現実の世を離れた氣になる。他も自分ひとを一步社会から遠ざかったように大目に見てくれる。こちらには一人前いちにんまえ働かなくともすむという安心ができ、向うにも一人前として取り扱うのが

気の毒だという遠慮がある。そうして健康の時にはとても望めな
 い長閑のどかな春がその間から湧わいて出る。この安らかな心がすなわ
 ちわが句、わが詩である。したがって、出来栄できばえの如何いかにはまず措おい
 て、できたものを太平の記念と見る当人にはそれがどのくらい貴とうと
 いか分らない。病中に得た句と詩は、退屈まぎを紛まらすため、閑かんに強し
 いられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の
 自由に跳ね返はつて、むつちりとした余裕を得た時、油然ゆうぜんと漲みなぎ
 り浮かんだ天来てんらいの彩紋さいもんである。吾ともなく興の起るのがす
 くに嬉うれしい、その興を捉とらえて横に咬かみ豎たてに碎くだいて、これを句なり詩
 なりに仕立上げる順序過程がまた嬉しい。ようやく成つた暁には、
 形おもむきのない趣はつきりを判然と眼の前に創造したような心持がしてさらに

嬉しい。はたしてわが趣とわが形に眞の価値があるかないかは顧みる^{いとま}違さえない。

病中は知ると知らざるとを通じて四方の同情者から懇切な見舞^{みまい}を受けた。衰弱の今の身ではその一々に一々の好意に背かないほどに詳しい^{くわ}礼状を出して、自分がつい死にもせず^{こんにち}今日に至つた経過を報ずる訳にも行かない。「思い出す事など」を^{しょうじよう}牀上^{しょうじよう}に書き始めたのは、これがためである。——各々^{めいめい}に向けて云い送るべきはずのところを、略して^{ぶんげいらん}文芸欄の一隅にのみ載せて、余のごときものために時と心を使われたありがたい人々にわが近況を知らせるためである。

したがって「思い出す事など」の中に詩や俳句を挟む^{はさ}のは、単

に詩人俳人としての余の立場を見て貰うつもりではない。実を云うとその善悪などはむしろどうでも好いとまで思っている。ただ当時の余はかくのごとき情調に支配されて生きていたという消息が、一瞥いちべつの迅ときうちに、読者の胸に伝われば満足なのである。

秋の江えに打ち込む杭くいの響こゝろかな

これは生き返つてから約十日ばかりしてふとできた句である。澄み渡る秋の空、広き江、遠くよりする杭の響、この三つの事相じそうに相応したような情調が当時絶えずわが微かすかなる頭の中を徂そ徠らいした事はいまだに覚えてゐる。

秋の空浅黄あさぎに澄あめり杉のに斧おの

これも同じ心の耽ふけりを他ほかの言葉で云い現したものである。

別るるや夢ゆめひとすじ一筋の天の川

何という意味かその時も知らず、今でも分らないが、あるいはほのかとうようじよう仄に東洋城と別れる折の連想が夢のような頭の中にはいまわ這回つて、恍惚とでき上ったものではないかと思う。

当時の余は西洋の語にほとんど見当らぬ風流と云う趣をのみ愛していた。その風流のうちでもここにあ挙げた句に現れるような一種の趣だけをとくに愛していた。

秋風や唐からくれなひ紅の咽喉のどほとけ仏

という句はむしろ実況であるが、何だか殺気があつてがんちく含蓄が足りなくて、口に浮かんだ時からすでに変な心持がした。

風流人未死。病裡領清閑。

日々山中事。朝々見碧山。

詩しに圈けんでん点のないのは障しょうじ子こに紙はが貼はつてないような淋さびしい感

じがするので、自分で丸を付けた。余のごとき平ひようそく 仄わきまもよく弁

えず、韻いんきやく 脚きゃく もうろ覚えにしか覚えていないものが何を苦しん

で、支那人にだけしか利ききめ目のない工夫くふうをあえてしたかと云うと、

実は自分にも分らない。けれども（平仄いんじ韻字はさておいて）、詩

の趣おもむきは王朝以後の伝習で久しく日本化されて今こんにち日に至つたもの

だから、吾々くらいの年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪

い去る事ができない。余は平生事に追われて簡易な俳句すら作ら

ない。詩となると億おっくう劫くわつでなお手を下くださない。ただ斯かよう様に現実界

を遠くに見て、杳はるかな心にすこしの蟠わだかまりのないときだけ、句も自然

と湧わき、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。そうして後あとから顧みると、それが自分の生しょう涯がいの中うちで一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器うつわが、無作法ぶさほうな十七字と、佶屈きつくつな漢字以外に日本で発明されたらいざ知らず、さもなければ、余はかかる時、かかる場合に臨んで、いつでもその無作法とその佶屈とを忍んで、風流を這裏しやりに楽しんで悔いざるものである。そうして日本に他の恰かつこう好こうな詩形のないのを憾うらみとはけっして思わないものである。

六

始めて読書欲の萌きざした頃、東京の玄耳君げんじくんから小包で醉古堂すいこどうけ劍掃んそうと列仙伝れつせんてんを送つてくれた。この列仙伝は帙入ちついりの唐本とうほんで、少し手荒に取扱うと紙がぴりぴり破れそうに見えるほどの古い——古いと云うよりもむしろ汚ない——本であつた。余は寝ながらこの汚ない本を取り上げて、その中にある仙人の挿画さしえを一々ていねい丁寧に見た。そうしてこれら仙人の髯ひげの模様だの、頭の恰好かっこうだのを互に比較して楽しんだ。その時は画工えかきの筆癖から来る特色を忘れて、こう云う頭の平らな男でなければ仙人になる資格がないのだろうと思つたり、またこう云う疎まぼらうな髯を風に吹かせなければ仙人の群むれに入る事は覚束おぼつかないのだろうと思つたりして、ひたすら彼等の容貌ようぼうに表われてくる共通な骨相を飽あかず眺めた。本文

も無論読んで見た。平生気の短かい時にはとても見出す事のできない悠ゆうちよう長な心をめでたく意識しながら読んで見た。——余は今の青年のうちに列仙伝を一枚でも読む勇氣と時間をもっているものは一人もあるまいと思う。年を取った余も実を云うとこの時始めて列仙伝と云う書物を開けたのである。

けれども惜しい事に本文は挿画ほど雅がに行かなかつた。中には欲かたまりの塊が羽化うかしたような俗な仙人もあつた。それでも読んで行くうちには多少氣に入つたのもできてきた。一番無雑作むざうさでかつおかしいと思つたのは、何ぞと云うと、手の垢あかや鼻糞はなくそを丸めて丸がんや薬くを作つて、それを人にやる道楽のある仙人であつたが、今ではその名を忘れてしまつた。

しかし挿画さしえよりも本文よりも余の注意を惹ひいたのは巻末にある
 附録であつた。これは手軽にいうと長寿法ちようじゆほうとか養生訓ようじようくんと
 か称するものを諸方から取り集めて来て、いっしよに並べたもの
 のように思われた。もつとも仙に化するための注意であるから、
 普通の深呼吸だの冷水浴だのとは違つて、すこぶる抽象的で、実
 際解るとも解らぬとも片のつかぬ文字であるが、病中の余にはそ
 れが面白かつたと見えて、その二三節をわざわざ日記の中に書き
 抜いている。日記を検しらべて見ると「静せいこれを性せいとなせば心そのうち其
 中そのうちにあり、動どうこれを心となせば性其中めつにあり、心生しようずれば性滅めつし、
 心滅すれば性生ず」というようなむずかしい漢文が曲がりくねり
 に半はん頁ページばかりを埋うずめている。

その時の余は印氣インキの切れた万年筆まんねんふでの端つまを撮とんで、ペン先へ墨の通うように一二度揮ふるのがすこぶる苦痛であつた。實際健康な人が片手で櫛かしの六尺棒を振り廻すよりも辛つらいくらいであつた。それほど衰弱はげの劇はげしい時にですら、わざわざとこんな道どう経ぎめいた文句を写す余裕が心にあつたのは、今から考えても真まことに愉快である。子供の時聖堂せいどうの図書館へ通つて、徂徠そらいの園けん十筆えんじっぴつをむやみに写し取つた昔を、生しょう涯がいにただ一度繰り返し得たような心持が起つて来る。昔の余の所作しよさが単に写すという以外には全く無意味であつたごとく、病後の余の所作もまたほとんど同様に無意味である。そうしてその無意味なところに、余は一種の価値を見出して喜んでいる。長生ながいきの工夫くふうのための列仙伝が、長生も

しかねまじきほど悠ゆうちよう長ながな心こゝろの下もとに、病後の余からかく気楽に取扱われたのは、余に取つて全くの偶然であり、また再びまた来るまじき奇縁である。

フランス

仏蘭西の老画家アルピニーはもう九十一二の高齡である。それでも人ひと並なみの氣力はあると見えて、この間のスチュージオには目め醒さましい木炭画が十種ほど載つていた。国朝こくちよう六家詩鈔りくかししやうの初はつにある沈徳潜しんとくせんの序しよには、乾隆丁亥夏五けんりゆうていがいかご長洲ちやうしゆう沈徳潜書す時しんたくせんしよに年九十有五。とわざわざ断つてある。長生ながいきの結構な事は云う

までもない。長生をしてこの二人のように頭がたしかに使つかえるのはななおさらめさらめでたい。不惑ふわくの齡よわいを越すと間もなく死しのうとして、わずかに助たすかつた余は、これからいつまで生きられるか固もとより分

らない。思うに一日生きれば一日の結構で、二日生きれば二日の結構であろう。その上頭が使えたらなおありがたいと云わなければなるまい。ハイズンは世間から二返へんも死んだと評判された。一度は弔ちやうし詩まで作ってもらった。それにもかかわらず彼は依然として生きていた。余も当時はある新聞から死んだと書かれたそうである。それでも実は死なずにいた。そうして列仙伝を読んで子供の時の無邪気な努力を繰り返し得るほどに生き延びた。それだけでも弱い余に取っては非常な幸福である。その頃ある知らない人から、先生死にたもう事なかれ、先生死にたもうことなかれと書いた見舞を受けた。余は列仙伝を読むべく生き延びた余を悦よろこぶと同時に、この同情ある青年のために生き延びた余を悦んだ。

七

ウオードの著わした社会学の標題には力学的ダイナミックという形容詞をわざわざ冠かんしてあるが、これは普通の社会学でない、力学的に論じたのだという事を特に断つたものと思われる。ところがこの本のかつて魯西亜語ロシア語に翻訳された時、魯国ろこくの当局者は直ただちにその発売を禁止してしまった。著者は不審の念に打たれて、その理由を在魯ざいろの友人に聞き合せた。すると友人から、自分にもよくは分らぬが、おそらく標題に力学的という字と社会学ソシオロジーという字があるので、当局者は一も二もなくダイナマイト及び社会主義に關係の

ある恐ろしい著述と速断して、この暴挙をあえてしたのだらうという返事が来たそうである。

魯国の当局者ではないが、余もこの力学的という言葉には少からぬ注意を払った一人である。平生から一般の学者がこの一字に着眼しないで、あたかも動きの取れぬ死物のように、研究の材料を取り扱いながらかえって平気でいるのを、常に飽き足らず眺めていたのみならず、自分と親密の関係を有する文芸上の議論が、ことにこの弊へいに陥りやすく、また陥りつつあるように見えるのを遺憾いかんと批判していたから、参考のため、一度は魯国当局者を恐れしめたというこの力学的社会学なるものを一読したいと思つてゐた。実は自分の恥はじを白状するようではなはだきまりが悪いが、こ

れはけつして新しい本ではない。製本の体裁ていさいからしてがすでに
 スペンサーの綜合そうごう哲学てつがくに類した古風なものである。けれども
 また恐ろしく分厚ぶんあつに書き上げた著作で、上下二巻を通じて千五百
 頁ほどある大冊子だから、四五日はおろか一週間かかっても楽に
 読みこなす事はできにく悪い。それでやむをえず時機の来るまでと思
 って、本箱の中へしまっておいたのを、小説類に興味を失しつしたこ
 の頃の読物としては適当だろうとふと考えついたので、それを宅うち
 から取り寄せてとうとう力学ダイナミツク的にソシオロジー社会学を病院で研究する事
 にした。

ところが読み出して見ると、恐ろしく玄関の広い前置の長い本
 であつた。そうして肝心かんじんの社会学そのものになるとすこぶる不

完全で、かつせつかくの頼みと思つてゐるいわゆる力学的がはなはだ心細くなるほどに手荒に取扱われていた。今更ウオードの著述に批評を下すのは余の目的でない、ただついでに云うだけではあるが、今に本当の力学的が出るだろう、今に高潮の力学的が出るだろうと、どこまでも著者を信用して、とうとう千五百頁の最後の一頁の最後の文字まで読み抜けて、そうして期待したほどのものがどこからも出て来なかつた時には、ちようどハレー彗星の尾で地球が包まれべき当日を、何の変化もなく無事に経過したほどあつけない心持がした。

けれども道中は、道草を食うべく余儀なくされるだけそれだけ多趣多様で面白かつた。その中で宇宙創造論と云う厳めしい標題

を掲げた所へ来た時、余は覚え^{むか}ず昔し学校で先生から教わった星^せ雲^{いうん}説^{せつ}の記憶を呼び起して微笑せざるを得なかつた。そうしてふと考えた。――

自分は今危険な病気からやっと回復しかけて、それを非常な仕^し合^あわせのように喜んでゐる。そうして自分の癒^なりつ^おつある間に、容赦なく死んで行く知名の人々や惜しい人々を今少し生かしておきたいとのみ冀^{こいねが}つてゐる。自分の介^{かい}抱^{ほう}を受けた妻や医者や看護婦や若い人達をありがたく思つてゐる。世話をしてくれた朋^{ほう}友^{ゆう}や、見舞に来てくれた誰^{たれ}彼^{かれ}やらには篤^{あつ}い感謝の念を抱いてゐる。そうしてここに人間らしいあるものが潜^{ひそ}んでゐると信じてゐる。その証^{しょうこ}拠^こにはここに始めて生き甲^が斐^いのあると思われるほど深い

強い快よい感じが漲みなぎっているからである。

しかしこれは人間相互の關係である。よし吾々われわれを宇宙の本位と見ないまでも、現在の吾々以外に頭を出して、世界のぐるりを見回さない時の内輪の沙汰さたである。三世さんぜに亘わたる生物全体の進化論と、(ことに)物理の原則に因よつて無慈悲に運行し情義なく發展する太陽系の歴史を基礎として、その間に微かすかな生を営む人間を考えて見ると、吾らごときものの一喜一憂は無意味と云わんほどに勢力のないという事実じじつに気がつかずにはいられない。

限りなき星霜せいそうを経て固まりかたかかった地球の皮が熱を得て溶解し、なお膨脹ぼうちようして瓦斯ガスに変形すると同時に、他の天体もまたこれに等しき革命を受けて、今日こんにちまで分離して運行した軌道と

軌道の間が隙間なく充たされた時、今の秩序ある太陽系は日月星辰の区別を失つて、爛たる一大火雲のごとくに盤旋するだろう。さらに想像を逆さまにして、この星雲が熱を失つて収縮し、収縮すると共に回転し、回転しながらに外部の一片を振りちぎりつつ進行するさまを思うと、海陸空気歴然と整えるわが地球の昔は、すべてこれ々たる一塊の瓦斯に過ぎないという結論になる。面目の髣髴たる今日から溯つて、科学の法則を、想像だも及ばざる昔に引張れば、一糸も乱れぬ普遍の理で、山は山となり、水は水となつたものには違かならうが、この山とこの水とこの空気と太陽の御蔭によつて生息する吾ら人間の運命は、吾らが生くべき条件の備わる間の一瞬時——永劫に展開すべき宇宙

歴史の長きより見たる一瞬時——を貪^{むさ}ぼるに過ぎないのだから、はかないと云わんよりも、ほんの偶然の命と評した方が当つていいかも知れない。

平生の吾らはただ人を相手にのみ生きてゐる。その生きるための空気については、あるのが当然だと思つていまだかつて心^{こころづ}遣^{かい}さえした事がない。その心^{こころ}根^ねを糺^{ただ}すと、吾らが生れる以上、空気は無ければならないはずだぐらいに観じてゐるらしい。けれども、この空気があればこそ人間が生れるのだから、実を云えば、人間のためにできた空気ではなくて、空気のためにできた人間なのである。今にもあれこの空気の成分に多少の変化が起るならば、——地球の歴史はすでにこの変化を予想しつつある——活^か澆^っな

る酸素が地上の固形物と抱ほうごう合してしだいに滅却するならば、炭素が植物に吸収せられて黒い石炭層に運び去らるるならば、月げつき球ゆうの表面に瓦斯ガスのかからぬごとくに、吾らの世界もまた冷却し尽くすならば、吾らはことごとく死んでしまわねばならない。今の余のように生き延びた自分を祝い、遠く逝ゆく他人を悲しみ、友なつかを懐なつかしみ敵にくを悪にくんで、内輪だけの活計かつけいに甘んじて得意にその日を渡る訳には行くまい。

進んで無機有機を通じ、動植両界つらぬを貫つらぬき、それらを万里一条の鉄のごとくに隙間すきまなく発展して来た進化の歴史と見倣みなすとき、そうして吾ら人類がこの大歴史中の単なる一頁ページを埋うむべき材料に過ぎぬ事を自覚するとき、百尺竿頭ひやくせきかんとうに上のぼりつめたと自任する人

間の自惚うぬぼれはまた急に脱落しなければならぬ。支那人が世界の地図を開いて、自分のいる所だけが中華でないと云う事を発見した時よりも、無気味な黒船が来て日本だけが神国でないという事を覚った時よりも、さらに溯さかのぼつては天動説が打ち壊されて、地球が宇宙の中心でなかつた事を無理に合点がてんせしめられた時よりも、進化論を知り、星雲説を想像する現代の吾らは辛からきジスイリユージョンを嘗なめてゐる。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。学者の例証するところによると、一疋びきの大口魚たらが毎年生子の数は百万疋とか聞く。牡蠣かきになるとそれが二百万の倍数のぼに上るといふ。そのうちで生長するのはわずか数匹すひきに過ぎないのだから

ら、自然は経済的に非常な濫費者らんびしやであり、徳義上には恐るべく残酷な父母ふぼである。人間の生死も人間を本位とする吾らから云えば大事件に相違ないが、しばらく立場を易かえて、自己が自然になり済ました気分りくつで観察したら、ただ至当しとうの成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟りくつは毫も存在ごうしていないだろう。

こう考えた時、余ははなはだ心細くなった。またはなはだつまらなくなつた。そこでことさらに気分を易かえて、この間大磯おおいそで亡なくなつた大塚夫人の事を思い出しながら、夫人のために手向たむけの句を作つた。

有る程の菊な抛なげ入れよ棺かんの中

た嬉しさがまだ消えないうちに、またそのいささかの胃の滞^{とどこ}うる重き苦しみに堪^たえ切れなくなつて来た。そうしてまた吐いた。吐くものは大概水である。その色がだんだん變つて、しまいには緑^ろくしよう青のような美しくしい液体になつた。しかも一^{いちりゆう}粒の飯さえあえて胃に送り得ぬ恐怖と用心^{もと}の下に、卒然として容赦なく食道を逆^{さか}さまに流れ出た。

青いものがまた色を変えた。始めて熊^{くま}の胆^いを水に溶き込んだよ^うに黒ずんだ濃い汁を、金^{かな}盞^{だらひ}になみなみと反^{もと}した時、医者は眉^{まゆ}を寄せて、こういうものが出るようでは、今のうち安静にして東京に帰つた方が好かろうと注告した。余は金盞^{ゆびさ}の中を指^{ゆびさ}していつたい何が出るのかと質問した。医者は興^{きよう}のない顔つきで、これ

は血だと答えた。けれども余の眼にはこの黒いものが血とは思えなかつた。するとまた吐いた。その時は熊の胆の色が少し紅くれないを含んで、咽喉なまぐさを出る時腥おりい臭がふんと鼻を衝ついたので、余は胸を抑えながら自分で血だ血だと云つた。玄耳げんじく君が驚おどろいて森もり成なりさんさかもとに坂元君を添そえてわざわざ修善寺しゆぜんじまで寄こしてくれたのは、この報知が長距離電話で胃腸病院へ伝つたつて、そこからまた直すぐに社へ通じたからである。別館から馳かけて来た東洋城とうようじょうが枕辺まくらべに立つて、今日東京から医者と社員が来るはずになつたと知らしてくれた時は全く救われたような気がした。

この時の余はほとんど人間らしい複雑な命を有して生きてはいなかつた。苦痛のほかは何事をも容いれ得えぬほどに烈はげしく活動する

胸を懐いだいて朝あさ夕ゆ悩んでいたのである。四十年来の経験けいけんを刻くんで
 なお余りあると見えた余の頭脳は、ただこの截せつ然ぜんたる一苦痛を
 秒ごとに深く印いんし来るばかりを能事とするように思われた。した
 がつて余の意識の内容はただ一色ひといろの悶もだえに塗抹とまつされて、臍さい上じょう
 方う三寸さんずんの辺あたりを日夜にうねうね行きつ戻りつするのみであつた。
 余は明け暮れ自分の身体からだの中で、この部分ぶぶんだけを早く切り取つて
 犬に投げてやりたい気がした。それでなければこの恐ろしい単調
 な意識を、一刻も早くどこへか打ちやつてしまいたい気がした。
 またできるならば、このまま睡魔すいまに冒おかされて、前後も知らず一週
 間ほど寝込んで、しかる後鷹揚おうような心持をゆたかに抱かいて、爽さわか
 な秋の日の光りに、両の眼を颯さつと開あけたかつた。少くとも汽車に

揺られもせず車に乗せられもせず、すうと東京へ歸つて、胃腸病院の一室に這入つて、そこに仰向けに倒れていたかつた。

森成さんが来てもこの苦しみはちよつと除れなかつた。胸の中を棒で攪き混ぜられるような、また胃の腑が不規則な大波をその全面に向つて層々と描き出すような、異な心持に堪えかねて、床の上に取り返し返りながら、吐いて見ましようかと云つて、腥いものを面のあたり咽喉の奥から金盞の中に傾けた事もあつた。森成さんの御蔭でこの苦しみがだいぶ退いた時ですら、動くたびに腥い噫は常に鼻を貫ぬいた。血は絶えず腸に向つて流れていたのである。

この煩悶に比べると、忘るべからざる二十四日の出来事以後

に生きた余は、いかに安住の地を得て静穩に生を営んだか分らない。その静穩の日がすなわち余のいっしょうがい一生涯にあつて最も恐るべき危険の日であつたのだと云う事を後から知つた時、余は下のよしもうな詩を作つた。

円。覚。曾。參。棒。喝。禪。

瞎。兒。何。処。觸。機。緣。

青。山。不。拒。庸。人。骨。

回。首。九。原。月。在。天。

九

忘るべからざる二十四日の出来事を書こうと思つて、原稿紙に向いかけると、何だか急に気が進まなくなつたのでまた記憶を逆さかさ

まに向け直して、後あと戻りもどをした。

東京を立つときから余は劇はげしく咽喉を痛めていた。いつしよに
来るべきはずでつい乗り後おくれた東洋城の電報を汽車中で受け
取つて、その意のごとくに御殿場ごてんばで一時間ほど待ち合せていた間ま
に、余は不用になつた一枚の切符代を割り戻して貰うために、駅
長室へ這入はいつて行つた。するとそこに腰ようい匣なんじやく何尺やくとでも形容す
べきほど大きな西洋人が、椅子いすに腰をかけてしきりに絵端書えはがきの表
に何か認したためていた。余は駅長に向つて当用を弁かたずる傍わら、思えいがけ
ない所に思えいがけない人がいるものだという好奇心を禁こじ得えな
かつた。するとその大男が突然立ち上がつて、あなたは英語を話す
かと聞くから、噎かれた声でわずかにイエスと答えた。男は次にこ

れから京都へ行くにはどの汽車へ乗ったら好いか教えてくれと云った。はなはだ簡単な用向ようむきであるから平生ならばどうとも挨拶あいさができないのだけれども、声量を全く失っていた当時の余には、それが非常の困難であつた。固もとより云う事はあるのだから、何か云おうとするのだが、その云おうとする言葉が咽喉のどを通るとき千条すじに擦り切れでもするごとくに、口へ出て来る時分には全く光沢つやを失つてほとんど用をなさなかつた。余は英語に通ずる駅員の助たすけを藉かりて、ようやくのことこの大男を無事に京都へ送り届けた事とは思ふが、その時の不愉快はいまだに忘れない。

修善寺しゆぜんじに着いてからも咽喉のどはいっこう好くならなかつた。医者から薬を貰つたり、東洋城こしらの拵こしらえてくれた手製の含漱がんそうを用い

たりなどして、辛く日常の用を弁ずるだけの言葉を使つてすま
していた。その頃修善寺には北白川の宮がおいでになつて
東洋城は始終そちらの方の務に追われて、つい一丁ほどしか隔
つていない菊屋の別館からも、容易に余の宿までは来る事ができ
ない様子であつた。すべてを片づけてから、夜の十時過になつて、
始めて蚊の外まで来て、一言見舞を云うのが常であつた。

そういう夜の事であつたか、または昼の話であつたか今は忘れ
たが、ある時いつものように顔を合わせると、東洋城が突然、殿
下からあなたに何か講話をして貰いたいという御注文があつたと
云い出した。この思いがけない御所望を耳にした余は少からず
驚いた。けれども自分でさえ聞かずにすめば、聞かずにいたいよ

うな不愉快な声を出して、殿下に御話などをする勇氣はとても出なかつた。その上羽織はおりも袴はかまも持ち合せなかつた。そうして余のごとき位階のないものが、妄みだりに貴たつとい殿下の前に出てしかるべきであるかないかそれが第一分らなかつた。實際は東洋城も独断で先例のない事をあえてするのを憚はばかつて、確しかとした御受はしなかつたのだそうである。

余の苦痛が咽喉から胃に移る間もなく、東洋城は故郷ふるさとにある母の病やまいを見舞うべく、去る人と入れ代つてひとまず東京に歸つた。殿下もそれからほどなく御立おたちになつた。そうして忘るべからざる二十四日の来た頃、東洋城は余に関する何の消息も知らずに、また東海道を汽車で西へ下つて行つた。その時彼は四五分の停車時

間を偷ぬすんで、三島から余にわざわざ一通の手紙を書いた。その手紙は途中で紛失してしまつて、つい宿へ着かなかつたけれども、東洋城が御暇おいとまごい乞こに上がった時、余の病気の事を御忘れにならなかつた殿下から、もし逢あう機会があつたなら、どうか大事にするようにというような篤あつい意味の御言葉を承つたため、それをわざわざ病中の余に知らせたのだそうである。咽喉いの病も癒え、胃の苦しみも去つた今の余は、謹つつしんで殿下に御礼を申上げなければならぬ。また殿下の健康を祈らなければならぬ。

十

雨がしきりに降った。裏山の絶壁を真逆まさかに下くだる筈かけいの竹が、青く冷たく光って見えた幾日を、物憂ものうく室へやの中に呻しんぎん吟ぎんしつ々暮していた。人が寝静ねしずまると始めて夢を襲おそう（欄らんかん干から六尺余りの所を流れる）水の音も、風と雨に打ち消されて全く聞えなくなつた。そのうち水が出るとか出たとか云う声がどこからともなく耳に響いた。

お仙せんと云う下女が来て、昨夕ゆうべ桂かつらがわ川がわの水が増したので門の前

の小家こいえではおおかたの荷こしらを拵こしらえて、預けに来たという話をした。

ついでにどこかでは家がまるで流されてしまつて、そうしてその家の宝物がどこかから掘り出されたと云う話もした。この下女は伊東の生れで、浜辺か畑中に立つて人を呼ぶような大きな声

を出す癖のあるすこぶる殺風景な女であったが、雨に鎖とぎされた山の中の宿屋で、こういう昔の物語めいた、嘘うそか真まか分らないことを聞かされたときは、御伽噺おとぎばなしでも読んだ子供の時のような気がして、何となく古めかしい香においに包まれた。その上家が流されたのがどこで、宝物を掘出したのがどこか、まるで不明なのをいつこう構わずに、それが当然であるごとくに話して行く様子が、いかにも自分の今いる温泉ゆの宿を、浮世から遠くへ離隔りかくして、どんな便りたよも噂うわさのほかには這入はいつてこられない山里に変化してしまったところに一種の面白味があった。

とかくするうちにこの楽たのしい空想が、不便な事実となつて現れ始めた。東京から来る郵便も新聞もことごとく後おくれ出した。たまた

ま着くものは墨がにじむほどびしょびしょに濡ぬれていた。湿ぬった
ページ頁を破けないように開けて見て、始めて都には今洪こうずい水みづが盛でさつ
 ているという報道を、鮮あざやかな活字の上にまのあたり見たのは、
いつか何日の事であったか、今たしかには覚えていないけれども、不安
 な未来を眼先に控ひかえて、その日その日の出来栄できばえを案あじながら病やむ
 身みには、けっして嬉うれしい便べんりではなかつた。夜中に胃の痛みで自
 然と眼まなこが覚さめて、身からだ体の置所ちどころがないほど苦くるしい時には、東京と自分
 とを繋つなぐ交通の縁ゆかりが当分切れたその頃の状態を、多少心細こまいもの
 に観みじない訳わけに行かなかつた。余の病氣は帰るには余あまり劇はげし過ぎ
 た。そうして東京の方から余のいる所まで来るには、道路みちがあま
 り打うち壊こわれ過ぎた。のみならず東京その物がすでに水みづに浸つかつてい

た。余はほとんど崖がけと共に崩れるくず吾家わがやの光景と、茅が崎さきで海に押し流されつつある吾子供らを、夢に見ようとした。雨のしたたか降る前に余は妻さいに宛てて手紙を出しておいた。それには好い部屋がないから四五日したら帰ると書いた。また病気が再発して苦くるんでいると云う事はわざと知らせずにおいた。そうしてその手紙も着いたか着かないか分らないくらいに考えて寝ていた。

そこへ電報が来た。それは恐るべき長い時間と労力を費ついやして、やつとの事無事に宛名あてなの人に通ずるや否や、その宛名の人をして封を切らぬ先に少しはつと思わせた電報であつた。しかし中は、今度の水害でこちらは無事だが、そちらはどうかという、見舞と平へい信しんをかねたものに過ぎなかつた。出した局の名が本郷とある

のを見てこれは草平君そうへいくんを煩わづらわしたものと知った。

雨はますます降り続いた。余の病氣はしだいに悪い方かたぶへ傾いて行つた。その時、余は夜の十二時頃長距離電話をかけられて、硬かたい胸を抑えながら受信器を耳に着けた。茅ヶ崎の子供も無事、東京の家も無事という事だけが微かすかに分つた。しかしその他は全く不得要領で、ほとんど風と話をするごとくに纏まとまらない雑音がぼうぼうと鼓膜に響くのみであつた。第一かけた当人がわが妻さいであるという事さえ覚さとらずにこちらからあなたという敬語を何遍か繰返したくらい漠然ぼんやりした電話であつた。東京の音信たよりが雨と風と洪水の中に、悩んでゐる余の眼に始めて瞭然と映つたのは、坐る暇もないほど忙いそがしい思いをした妻が、当時の事情をありのままに認したた

めた巨細こさいの手紙がようやく余の手に落ちた時の事であった。余はその手紙を見て自分の病やまいを忘れるほど驚いた。

病んで夢む天の川より出水でみずかな

十一

妻さいの手紙は全部の引用を許さぬほど長いものであった。冒頭に東洋城から余の病気の報知を受けた由と、それがため少からず心を悩ましている旨むねを記して、看病に行きたいにも汽車が不通で仕方がないから、せめて電話だけでも思つて、その日の中には通じかねるところを、無理な至急報にして貰もらつて、夜半やはんに山田の奥

さんの所からかけたという説明が書いてあつた。茅ヶ崎ちさきにいる子供の安否についても一方ひとかたならぬ心配をしたものらしかった。十じヶんげんざざかかした

間坂下まざかという所は水害の恐れがないけれども、もし万一の事があれば、郵便局から電報で宅まで知らせて貰うはずになると、余に安心させるため、わざわざ断つてあつた。そのほか市中たいていの平地ひらちは水害を受けて、現に江戸川通などは矢来やらいの交番の少し下まで浸つかつたため、舟に乗つて往来ゆききをしているという報知も書き込んであつた。しかしその頃は後おくれながらも新聞が着いたから、一般の模様は妻の便りがなくてもほぼ分つていた。余の心を動かすべき現象は漠然ぼくぜんたる大社会の雨や水やと戦う有様にあると云うよりも、むしろ己おのれだけに密接の関係ある個人の消息にあ

った。そうしてその個人の二人までに、この雨と水が命の間際ま
 で崇たたつた顛てん末まつを、余はこの書面うちの中に見出したのである。

一つは横浜に嫁とついだ妻の妹の運命に關した報知であつた。手紙
 にはこう書いてある。

「……梅子事末すえの弟を伴つれて塔とうの沢さわの福住ふくずみへ参り居そうろうり候ま、水
 害のため福住は浪なみに押し流され、浴客よくかく六十名のうち十五名行方
 不明ふめいとの事にて、生死の程も分らず、如何いかんとも致し方なく、横浜
 へは汽車不通にて参る事叶かなわず、電話は申込者多数にて一日を待
 たねば通じ不申もうさず……」

後あとには、いろいろ込み入くめんつた工面をして電話をかけた手續が書
 いてあつて、その末に会社の小使とかが徒歩で箱根まで探しに行

つたあげく、幽霊のように哀あわれな姿をした彼かのおんな女なを伴れて戻つた模様が述べてあつた。余はそこまで読んで来て、つい二三日前宿の下女から、ある所で水が出て家が流されて、その家の宝物がまたある所から掘り出されたという昔話のような物語を聞きながら、その裏には自分と利害の糸を絡からみ合あわせなければならぬ恐ろしい事実が潜ひそんでいても気がつかずに、尾おかしら頭もない夢とのみ打ち興じてすましていた自分の無智に驚いた。またその無智を人間に強しいる運命の威力を恐れた。

もう一つ余の心を躍おどらしたのは、草平君に関する報知しらせであつた。妻さいが本郷の親類で用を足した帰りとかに、水見舞のつもりで柳やなぎ町ちやうの低い町から草平君の住んでいる通りまで来て、ここらだが

と思ひながら、表から奥を覗いて見ると、かねて見覚えのある家がくしやりと潰れていたそうである。

「家の人達は無事ですか、どこへ行きまされたかと聞いたら、薪屋の御上さんが、昨晚の十二時頃に崖が崩れましたが、幸いにどなたも御怪我はございません。ひとまず柳町のこういう所へ御引移りになりましたと、教えてくれましたから、柳町へ来て見ると、まだ水の引き切らない床下のぴたぴたに濡れた貸家に畳建具も何も入れずに、荷物だけ運んでありました。実に何と云つて好いか憐れな姿でお種さんが、私の顔を見ると馳け出して来ました。……晩の御飯を拵える事もできないだろうと思つて、御寿司を誂えて御夕飯の代りに上げました……」

草平君は平生ふだんから崖崩れを恐れて、できるだけ表へ寄つて寝るとか聞いていたが、家の潰つぶれた時には、外ほかのものがまるで無難であつたにもかかわらず、自分だけは少し顔へ怪我けがをしたそうである。その怪我の事も手紙うちの中に書いてあつた。余はそれを読んで怪我だけでまず仕合せだと思つた。

家を流し崖を崩すす凄まじい雨と水の中に都のものは幾万となく恐るべき叫び声を揚あげた。同じ雨と同じ水の中に余と関係の深い二人は身をもつて免まぬかれた。そうして余は毫ごうも二人の災難を知らずに、遠い温泉でゆの村に雲と煙けぶりと、雨の糸を眺め暮していた。そうして二人の安全であるという報知しらせが着いたときは、余の病やまいがしだいしだいに危険の方へ進んで行つた時であつた。

風に聞け何れか先に散る木の葉

十二

つづく雨の或る宵に、すこし病の閑を偷んで、下の風呂場へ降りて見ると、半切を三尺ばかりの長に切つて、それを細長く豎に貼りつけた壁の色が、暗く映る灯の陰に、ふと余の視線を惹いた。余は湯壺の傍に立ちながら、身体を濡めす前に、まずこの異様の広告めいたものを読む気になつた。真中に素人落語大会と書いて、その下に催主裸連と記してある。場所は「山荘にて」と断つて、催しのあるべき日取をその傍に書き添えた。余は

すぐ裸連の何人なんびとなるかをさと覚り得た。裸連とは余の隣座敷にいる
 泊り客の自撰いみようにかかる異名である。昨日きのうの午襖ひるふすまごし越こに聞いて
 いると、太郎冠者たろうかじやがどうのこうのと長い評議の末、そこところ
 でやるまいぞ、やるまいぞにしたら好いじやねえかと云うような
 相談があつた。その趣向しゆうこうは寝ている余とは固もとより無関係だから、
 知ろうはずもなかつたが、とにかくこの議決が山荘もよおでの催もよおしに一
 異彩を加えた事はたしかに違ちがはないと思つた。余は風呂場の貼紙はりがみ
 に注意してある日付と、裸連はだかれんの趣向しゆうこうを凝こらしていた時刻を照
 らし合せつつ、この落語会なるものの、すでに滞とどりなくすんだ昨
 日の午後を顧みて、裸連——少くとも裸連の首脳かたちづくの構かたちづく成なる隣
 座敷の泊り客……の成功を祝せざるを得なかつた。

この泊り客は五人連ごにんづれで一間ひとまに這入はいっていた。その中の一番年うち尚しかきに見える三十代の男に、その妻君と娘を合せるとすでに三人になる。妻君は品のいい静かな女であつた。子供はなおさらおとなしかつた。その代り夫はすこぶる騒々しかつた。あとの二人はいずれも二十代の青年で、その一人は一行のうちでもつともやかましくふるまっていた。

誰でも中年以後になつて、二十一二時代の自分を眼の前に憶おもひ浮べて見ると、いろいろ回想の簇むらがる中に、気恥きはぢかしくて冷汗の流れそうな一断面を見出すものである。余は隣の室へやに呻吟しんぎんしながら、この若い男の言葉使いや起居たちいを注意すべく余儀なくされた結果として、二十年の昔に経過した、自分の生しょうがい涯がいのうちで、

はなはだ不面目と思わざるを得ない生意気さ加減を今更のように恐れた。

この男は何の必要があつてか知らないけれども、絶えず大^{だいどう}道で講演でもするようになきな声を出して得意であつた。そうして下女が来ると、必ず通^{つうかく}客めいた粹^{いき}がり^をを連発した。それを隣^{となり}に坐敷^{ざしき}で聞いていると、ウイットにもならなければヒューモーに

もなつていないのだから、いかにも無理やりに、（しかも大得意に、）半可^{はんか}もしくは四半可^{しはんか}を殺風景に怒鳴^{どな}りつけているとしか思われなかつた。ところが下女の方では、またそれを聞きたびに不必要にふんだんな笑い方をした。本気とも御世辞^{おせじ}とも片のつかない笑い方だけでも、声帯に異状のあるような恐ろしい笑い方を

した。病氣にのみ屈託くつたくする余も、これには少からず悩まされた。裸連の一部は下座敷にもいた。すべてで九人いるので、自みづから九人組とも称となえていた。その九人組が丸裸になつて幅六尺の縁側へ出て踊をおどつて一晚跳はね廻つた。便所へ行く必要があつて、障子しょうじの外へ出たら、九人組は躍おどり草臥くたびれて、素裸すはだかのまま縁側に胡坐あぐらをかいていた。余は邪魔になる尻しりや脛すねの間を跨またいで用を足して来た。

長い雨がようやく歇やんで、東京への汽車がほぼ通ずるようになった頃、裸連は九人とも申し合せたように、どつと東京へ引き上げた。それと入れ代りに、森成さんと雪鳥せつちようくん君と妻さいとが前後して東京から来てくれた。そうして裸連のいた部屋を借り切つた。

その次の部屋もまた借り切った。しまいには新築の二階座敷を四間^まともに吾^{わが}有^{ゆう}とした。余は比較的閑寂な月日^{もと}の下に、吸^{すい}飲^{のみ}から牛乳を飲んで生きていた。一度は匙^{さじ}で突き砕^{くだ}いた水瓜^{すいか}の底から湧^わいて出る赤い汁を飲^のまして貰^{もら}った。弘^{こう}法^{ぼう}様^{さま}で花火^{あが}の揚^あつた宵^{よい}は、縁^{えん}近く寝床^{ねど}を摺^ずらして、横^{よこ}になつたまま、初^{はつ}秋^{あき}の天^{そら}を夜^{やはん}半^{ぢか}近くまで見守^{みまも}つていた。そうして忘^{わす}るべからざる二十四日^{にじゅうよっぴ}の来^きるのを無意識^{むいしぎ}に待^{まち}っていた。

萩^{はぎ}に置く露^{つゆ}の重^{おも}きに病^{やま}む身^みかな

十三

その日は東京から杉本さんが診察に来る手筈になつていた。雪鳥君が^{おおひと}大仁まで迎^{むかえ}に出たのは何時頃か覚えていないが、山の中を照らす日がまだ山の下に隠れない^{ひるすぎ}午過であつたと思う。その山の中を照らす日を、床を離れる事のできない、また室^{へや}を出る事の叶^{かな}わない余は、朝から晩までほとんど仰ぎ見た試^{めあて}しががないのだから、こう云うのも実は^{ひさし}廂の先に余る空の端^{はし}だけを^{めあて}目当に想像した^{こくげん}刻限である。——余は^{しゅぜんじ}修善寺に^{ふたつき}二月と^{いつか}五日ほど滞在しながら、どちらが東で、どちらが西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街道か、まるで知らずに帰つたのである。

杉本さんは予定のごとく宿へ着いた。余はその少し前に、妻^{さい}の手から吸^{すいのみ}飲を受け取つて、細長い硝子^{ガラス}の口から生^{なまぬる}温い牛乳を

一合ほど飲んだ。血が出てから、安静状態と流動食事とは固く守
 らなければならぬ掟おきてのようになっていたからである。その上で
 きるだけ病人に營養を与えて、体力の回復の方から、潰瘍かいようの出
 血を抑えつけるといふ療法を受けつつあつた際だから、否いやおう応
 なしに飲んだ。実を云うとこの日は朝から食欲が萌きざさなかつたの
 で、吸飲の中に、動く事のできぬほど濁つた白い色の漲みなぎる様を
 見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜たまるしつ濃こい乳の味を
 予想して、手に取らない前からすでに反感を起した。強いられた
 時、余はやむなく細長く反そり返かえつた硝子の管くだを傾けて、湯とも水
 とも捌さばけない液しるを、舌の上に注すべらせようと試みた。それが流れて
 のどのどをくだくだああとには、潔いさぎよからぬ粘ねばり強い香かが妄みだりに残つた。半分

は口直しのつもりであとから氷クリアイスームを一杯取って貰った。ところがいつもの爽さわかさに引き更えて、咽喉のどを越すときいったん溶とけたものが、胃の中で再び固まったように妙に落ちつきが悪かった。それから二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

診察の結果として意外にもさほど悪くないと云う報告を得た時、平生森成さんから病気の質たちが面白くないと聞いていた雪鳥君は、喜びの余りすぐ社へ向けて好いという電報を打ってしまった。忘るべからざる八百グラムの吐血は、この吉報を逆襲すべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起ったのである。

かく多量の血を一度に吐いた余は、その暮方の光景から、日の

ない真夜中を通して、明る日の天明に至る有様を巨細残らず記憶している氣でいた。程経て妻の心覚につけた日記を読んで見て、その中に、ノウヒンケツ（狼狽した妻は脳貧血をかくのごとく書いている）を起し人事不省に陥るとあるのに気がついた時、余は妻は枕辺まくらべに呼んで、当時の模様を委しく聞く事ができた。徹頭徹尾明瞭めいりような意識を有して注射を受けたとのみ考えていた余は、実に三十分の長い間死んでいたのであった。

夕暮間近く、にわかには胸苦しいある物のために襲われた余は、悶もだえたさの余りに、せつかく親切に床の傍わきに坐すわっていてくれた妻に、暑苦しくていけないから、もう少しそつちへ退どいてくれと邪じ慳やけんに命令した。それでも堪たえられなかつたので、安静に身を横よこた

うべき医師からの注意に背そむいて、仰あおむけ向むきの位いち地ちから右を下に寝返ろうと試みた。余の記憶のぼに上のぼらない人事不省の状態は、寝ながら向むきを換かえにかかったこの努力に伴う脳貧血の結果だと云う。

余はその時さつと迸ほとぼしる血潮を、驚ろいて余に寄り添おうとした妻の浴衣ゆかたに、べつとり吐はきかけたそうである。雪鳥君は声こゑを顫ふるわしながら、奥さんしつかりしなくてははいけませんと云ったそうである。社へ電報をかけるのに、手わななが戦ないて字が書けなかったそうである。医師は追っかけ追っかけ注射を試みたそうである。後から森成さんにその数を聞いたら、十六筒とうまでは覚えていますと答えた。

淋。漓。絳。血。腹。中。文。

嘔。照。黄。昏。漾。綺。紋。

入夜空疑身是骨。
臥牀如石夢寒雲。

十四

眼を開けて見ると、右向になつたまま、瀬戸引の金盥の中
に、べつとり血を吐いていた。金盥が枕に近く押付けてあつたの
で、血は鼻の先に鮮かに見えた。その色は今日までのように酸
の作用を蒙つた不明瞭なものではなかつた。白い底に大きな動
物の肝のごとくどろりと固まっていたように思う。その時枕元で
含嗽を上げましようという森成さんの声が聞えた。

余は黙つて含嗽をした。そうして、つい今しがた傍にいる妻に、

少しそつちへ退いてくれと云つたほどの煩悶はんもんが忽然こつぜんどこかへ消えてなくなつた事を自覚した。余は何より先にまあよかつたと思つた。金盥に吐いたものが鮮血であらうと何であらうと、そんな事はいつこう気にかからなかつた。日頃からの苦痛かたまりの塊を一度にどさりと打ちやり切つたという落ちつきをもつて、枕元まくらもとの人がざわざわする様子をほとんどよそごとのように見ていた。余は右の胸の上部に大きな針を刺されてそれから多量の食塩水を注射された。その時、食塩を注射されるくらいだから、多少危険な容ようた体に逼せまっているのだらうとは思つたが、それもほとんど心配にはならなかつた。ただ管くだの先から水が洩もれて肩の方へ流れるのが厭いやであつた。左右の腕にも注射を受けたような気がした。しかし

それは確然はつきり覚えていない。

妻さいが杉本さんに、これでも元のようになるでしょうかと聞く声こゑが耳みみに入った。さよう潰瘍かいようではこれまで随分多量の血ちを止とめた事こともあります。……と云う杉本さんの返事こたへが聞えた。すると床とこの上に釣つるした電気灯でんきとうがぐらぐらと動いた。硝子ガラスの中に彎わん曲きよくした一本いっぴんの光ひかりが、線香煙花せんこうはなびのように疾とく閃きらめいた。余あまは生なれてからこの時ときほど強つよくまた恐おそろしく光力ひかりりきを感じた事ことがなかつた。その咄とつ嗟さの刹せつ那なにすら、稲妻いなずまを眸ひとみに焼やきつけるとはこれだと思おもつた。時に突然とつぜん電気灯でんきとうが消きえて気が遠とほくなつた。

カンフル、カンフルと云う杉本さんの声こゑが聞えた。杉本さんは余あまの右みぎの手頸てくびをしかと握にぎっていた。カンフルは非常ひじょうによく利きくね、

注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんがまた森成さんに云った。森成さんはええと答えたばかりで、別にはかばかりしい返事はしなかった。それからすぐ電気灯に紙の蔽おおいをした。

傍はたがひとしきり静かになった。余の左右の手頸は二人の医師に絶えず握られていた。その二人は眼を閉じている余を中に挟はさんで下しものような話をした（その単語はことごとく独逸語ドイツごであつた）。

「弱い」

「ええ」

「駄目だろう」

「ええ」

「子供に会わしたらどうだろう」

「そう」

今まで落ちついていた余はこの時急に心細くなつた。どう考え
ても余は死にたくなかつたからである。またけつして死ぬ必要の
ないほど、楽な気持でいたからである。医師が余を昏睡こんすいの状態
にあるものと思ひ誤つて、忌憚きたんなき話を續けているうちに、未練
な余は、瞑目めいもく不動の姿勢にありながら、半無気味な夢に襲われ
ていた。そのうち自分の生死に関する斯様かように大胆な批評を、第三
者として床の上じつと聞かせられるのが苦痛になつて来た。し
まいには多少腹が立つた。徳義上もう少しは遠慮してもよきそう
なものだと思つた。ついに先がそう云う料簡りょうけんならこつちにも
考えがあるという氣になつた。——人間が今死のうとしつつある

間際まぎわにも、まだこれほどに機略ろくを弄し得るものかと、回復期に向
った時、余はしばしば当夜の反抗心を思い出しては微笑ほほえんでいる。
——もつとも苦痛が全く取れて、安臥あんがの地位を平静に保っていた
余には、充分それだけの余裕があつたのであろう。

余は今まで閉じていた眼を急に開けた。そうしてできるだけ大
きな声と明めいりよう瞭な調子で、私わたしは子供などに会いたくはありません
んと云つた。杉本さんは何事をも意に介せぬごとく、そうですか
と軽く答えたのみであつた。やがて食いかけた食事を済まして来
るとか云つて室へやを出て行つた。それから左右の手を左右に開い
て、その一つずつを森成さんと雪鳥君に握られたまま、三人とも
無言のうちに天明に達した。

冷やかな脈を護りぬ夜明方

十五

強しいて寝返ねがえりを右に打とうとした余と、枕元の金かな盥だらいに鮮血を認めた余とは、一分いちぶの隙すきもなく連続しているとのみ信じていた。その間には一本の髪毛かみげを挟はさむ余地のないまでに、自覚が働いて来たとのみ心得ていた。ほど経へて妻さいから、そうじゃありません、あの時三十分ばかりは死んでいらしたのですと聞いた折は全く驚いた。子供こどものとき悪いたずら戯わらをして気絶をした事は二三度あるから、それから推測して、死とはおおかたこんなものだろうぐらいには

かねて想像していたが、半時間の長き間、その経験を繰返しながら、少しも気がつかずに一カ月あまりを当然のごとくに過したかと思うと、はなはだ不思議な心持がする。実を云うとこの経験——

——第一経験と云い得るかが疑問である。普通の経験と経験の間に挟まって毫もその連結を妨げ得ないほど内容に乏しいこの——余は何と云つてそれを形容していいかついに言葉に窮してしまふ。

余は眠から醒めたという自覚さえなかつた。陰から陽に出たとも思わなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂い、古い記憶の影、消える印象の名残——すべて人間の神秘を叙述すべき表現を数え尽してようやく髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考えなかつた。ただ胸苦しくなつて枕

の上の頭を右に傾むけようとした次の瞬間に、赤い血を金盞の底に認めただけである。その間に入り込んだいこ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても経験の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とはそれほどはかないものかと思つた。そうして余の頭の上にしかく卒然と閃めいたきら生死二面の対照の、いかにも急劇でかつ没交渉なのに深く感じた。どう考えてもこの懸隔かけへだつた二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得できなかつた。よし同じ自分が咄嗟とつさの際に二つの世界を横断したにせよ、その二つの世界がいかなる關係を有するがために、余をしてたちまち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考えると、茫然ぼうぜんとして自失せざるを得な

つた。

生死とはかんきゆう緩急、大小、寒暑と同じく、対照の連想からして、

日常一ひとたば束ひとたばに使用される言葉である。よしばんきん輓近ばんきんの心理学者の唱

うるごとく、この二つのものもまた普通の対照と同じく同類連想

の部に属すべきものと判ずるにしたところで、かくてのひらぬるが掌を翻えすと

一般に、唐とうとつ突とうとつなるかけ離れた二象フエーゼス面が前後して我を擒とりこにす

るならば、我はこのかけ離れた二象面を、どうして同性質のもの

として、その関係を迹あとづ付ける事ができよう。

人が余に一個の柿を与えて、今日は半分喰え、明日あすは残りの半

分の半分を喰え、その翌あくるひ日はまたその半分の半分を喰え、かく

して毎日現に余れるものの半分ずつを喰えと云うならば、余は喰

い出してから幾いくかめ日目かに、ついにこの命令に背そむいて、残る全部を
 ことごとく喰い尽すか、または半分なに割る能力の極度に達したた
 め、手を拱こまぬいて空むなしく余のこれる柿の一片いっぺんを見つめなければならな
 い時機もとが来るだろう。もし想像の論理を許すならば、この条件の
 下に与えられたる一個の柿は、生しょうが涯がい喰つても喰い切れる訳が
 ない。希臘ギリシヤの昔ゼノが足の疾ときアキリスと歩みの鈍のろい亀との間
 に成立する競争ことばに辞を託して、いかなるアキリスもけつして亀に
 追いつく事はできないと説いたのは取も直さずこの消息である。
 わが生活の内容を構かたちづく成なる個々の意識もまたかくのごとくに、
 日ごとか月ごとに、その半なかばずつを失つて、知らぬ間にいつか死に
 近づくなれば、いくら死に近づいても死ねないと云う非事実な論

理に愚弄ぐろうされるかも知れないが、こう一足飛びに片方から片方に
 落ち込むような思索上の不調和を免まぬかれて、生から死に行くけいろ徑路
 を、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだろう。俄然がぜんとして死
 し、俄然として吾われに還かえるものは、否、吾に還つたのだと、人から
 云い聞かざるるものは、ただ寒くなるばかりである。

縹。縵。玄。黄。外。 死。生。交。謝。時。 寄。託。冥。然。去。

我。心。何。所。之。 歸。來。覓。命。根。 杳。✕。

孤。愁。空。遶。夢。 宛。動。肅。瑟。悲。 江。山。秋。已。老。

粥。藥。✕。 廓。寥。天。尚。在。 高。樹。獨。余。枝。

晚。懷。如。此。澹。 風。露。入。詩。遲。

十六

安らかな夜はしだいに明けた。室へやを包む影法師が床とこを離れて遠と退おのくに従つて、余はまた常のごとく枕まくら辺らべに寄る人々の顔を見る事ができた。その顔は常の顔であつた。そうして余の心もまた常の心であつた。病やまいのどこにあるかを知り得ぬほどに落ちついた身を床の上に横よこたえて、少しだに動く必要をもたぬ余に、死のなお近く徘徊はいかいしていようとは全く思い設けぬところであつた。眼を開けた時余は昨夕ゆうべの騒ぎを（たとい忘れないまでも）ただ過去たの夢のごとく遠くに眺めた。そうして死は明け渡る夜と共に立たち退のいたのだらうぐらいの度胸でも据すわつたものと見えて、何らの掛念けねんも

ない気分を、障しょうじ子から射し込む朝日の光に、心地こころちよく曝さらして
 た。実は無知な余を詐いつわり終おほせた死は、いつの間にか余の血管に
 潜もぐり込んで、乏ともしい血を追い廻しつっ流れていたのでそうである。
 「容ようだい体を聞くと、危険なれどごく安静せいじつにしていれば持ち直すか
 も知れぬという」とは、妻さいのこの日の朝の部に書き込んだ日記の
 一句である。余が夜明まで生きようとは、誰も期待していなかつ
 たのだとは後から聞いて始めて知った。

余は今でも白い金かなだらひ盥せんの底に吐き出された血の色と恰かつこう好と
 を、ありありとわが眼の前に思い浮べる事ができる。ましてその
 当分は寒かんてん天のように固まりかけた腥なまぐさいものが常に眼先に散らつ
 いていた。そうして吾わが想像に映る血の分量と、それに起因した

衰弱とを比較しては、どうしてあれだけの出血が、こう劇しく身体からだにこたえるのだらうといつでも不審に堪たえなかつた。人間は脈の中の血を半分失うと死に、三分の一失うと昏こんすい睡するものだといいて、それに吾われとも知らず妻さいの肩に吐きかけた生血なまちの容積かさを想像てんびんの天秤てんびんに盛もつて、命の向う側に重おもりとして付け加えた時ですら、余はこれほど無理な工面くめんをして生き延びたのだとは思えなかつた。

杉本さんが東京へ帰るや否や、——杉本さんはその朝すぐ東京へ帰かつた。もつとおりたいが忙いそがしいから失礼します、その代り手当は充分するつもりでありますと云いつて、新あたらしい襟えりと襟えり飾かざりを着かけ易かえて、余の枕辺まくらべに坐まつたとき、余は昨ゆう夕べ夜半よなかに、袴ゆき丈たけの足たりない宿ゆかたの浴衣ゆかたを着かけたまま、そつと障しょうじ子こを開ひらけながら、

どうかと一言森成さんに余の様子を聞いていた彼人の様子を
思い出した。余の記憶にはただそれだけしかとまらなかつた杉本
さんが、出がけに妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、どうして
も回復の見込はないものと御諦おあきらめなさらなければいけませんと
注意を与えたそうである。実は昨夕にもこの恐るべき再度の吐血
が来そうなので、わざわざモルヒネまで注射してそれを防ぎ止め
たのだとは、後のちになってその顛末てんまつを審つまびらかにした余に取つて、
全く思いがけない報知であつた。あれほど胸の中うちは落ちついてい
たものをと云いたいくらいに、余は平へい常じょうの心持で苦痛なくその
夜を明したのである。——話そがつい外それてしまった。

杉本さんは東京へ帰るや否や、自分で電話を看護婦会へかけて、

看護婦を二人すぐ余の出先へ送るように頼んでくれた。その時、早く行かんと間に合わないかも知れないからと電話口で急せいたので、看護婦は汽車で走る途みちみち々も、もういけない頃ではなからうかと、絶えず余の生命に疑いを挟さしさんでいた。せつかく行つても、行き着いて見たら、遅過ぎて間に合わなかつたと云うような事があつてはつまらないと語り合つて来た。——これも回復期に向いた頃、病びようしやう牀しょうの徒つれづれ然ぜんに看護婦と世間話をしたついでに、彼等の口からじかに聞いたたよりである。

かくすべての人に十の九まで見放された真中まなかに、何事も知らぬ余は、曠野こうやに捨てられた赤子あかごのごとく、ぽかんとしていた。苦痛なき生は余に向つて何らの煩悶はんもんをも与えなかつた。余は寝なが

らただ苦痛なく生きておるといふ一事実を認めるだけであつた。そうしてこの事実が、はからざる病やまいのために、周囲の人の丁ていちよ重うな保護を受けて、健康な時に比べると、一步浮世の風の当りあた悪にくい安全な地に移つて来たように感じた。實際余と余の妻とは、生存競争の辛からい空氣が、直じかに通わない山の底に住んでいたのである。

露けさの里にて静しずかなる病やまい

十七

臆病者の特権として、余はかねてより妖怪ようかいに逢あう資格がある

と思つていた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れている。文明の肉が社会の鋭どき鞭むちの下もとに萎縮いしゆくするとき、余は常に幽霊を信じた。けれども虎烈刺コレラを畏おそれて虎烈刺に罹かからぬのごとく、神に祈つて神に棄すてられた子のごとく、余は今日きょうまでこれと云う不思議な現象に遭遇する機会もなく過ぎた。それを残念と
 思うほどの好奇心もたまには起るが、平生はまず出逢であわないのを
 当然と心得てすまして来た。

自白すれば、八九年前アンドリュ・ラングの書いた「夢と幽霊」という書物を床の中に読んだ時は、鼻の先の灯とも火しびを一時に寒く眺めた。一年ほど前にも「靈妙なる心力」と云う標題に引かされてフランマリオンという人の書籍を、わざわざ外国から取り寄せ

た事があつた。先頃はまたオリヴァー・ロツジの「死後の生」を読んだ。

死後の生！ 名からしてがすでに妙である。我々の個性が我々の死んだ後^{のち}までも残る、活動する、機会があれば、地上の人と言葉を換^{かわ}す。スピリチズムの研究をもつて有名であつたマイエルはたしかにこう信じていたらしい。そのマイエルに自己の著述を捧げたロツジも同じ考えのように思われる。ついこの間出たポドモアの遺著もおそらくは同系統のものだろう。

独^{ドイツ}乙のフエヒナーは十九世紀の中頃すでに地球その物に意識の存すべき所以^{ゆえん}を説いた。石と土と鋳^{あらがね}に靈があると云うならば、有るとするを妨^{さまた}げる自分ではない。しかしせめてこの仮定から出立

して、地球の意識とは如何なる性質のものであろうぐらいの想像はあつてしかるべきだと思ふ。

吾々の意識には敷居のような境界線があつて、その線の下は暗く、その線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論のように見えるし、またわが経験に照らしても至極と思われるが、肉体と共に活動する心的現象に斯様の作用があつたに似たところで、わが暗中の意識すなわちこれ死後の意識とは受取れない。

大いなるものは小さいものを含んで、その小さいものに気がついているが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己らの寄り集つて拵らえている全部に対しては風馬牛のごとく

おのれ

こし

ふうばぎゆう

無頓着むとんじやくであるとは、ゼームスが意識の内容を解き放したり、また結び合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全体の意識もまたより大いなる意識の中うちに含まれながら、しかもその存在を自覚せずに、孤立するごとくに考えているのだらうとは、彼がこの類推るいすいより下くだし来きたるスピリチズムに都合よき仮定である。

仮定は人々の随意であり、また時にとって研究上必要の活力でもある。しかしただ仮定だけでは、いかに臆病の結果幽霊を見ようとする、また迷信きよくの極不可思議を夢みんとする余も、信力をもつて彼らの説を奉ずる事ができない。

物理学者は分子の容積を計算して蚕かいこの卵にも及ばぬ（長さ高さともに一ミリメートルの）立方体に一千万を三乗した数はいが這入ると

断言した。一千万を三乗した数とは一の下に零れいを二十一付けた莫ば大くだいなものである。想像ほしいまを恣まにする権利を有する吾われわれ々もこの一の下に二十一の零を付けた数を思い浮べるのは容易でない。

形けいじか而下の物質界にあつてすら、——相当の学者が綿密な手続を

経て発表した数字上の結果すら、吾々はただ数理的の頭脳にのみもつともと首肯うなずくだけである。数量のあらましさえ応用の利かぬ

心の現象に關しては云うまでもない。よし物理学者の分子に対す

るとき明めいりよう瞭りょうな知識が、吾人ごじんの内面生活を照らす機会が来た

にしたところで、余の心はついに余の心である。自分に経験のできない限り、どんな綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい。

余は一度死んだ。そうして死んだ事実を、平生からの想像通りに経験した。はたして時間と空間を超越した。しかしその超越した事が何の能力をも意味しなかった。余は余の個性を失った。余の意識を失った。ただ失った事だけが明白なばかりである。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥めい合ごうできよう。臆病にしてかつ迷信強き余は、ただこの不可思議を他人ひとに待つばかりである。

迎むかいび火たを焚たいて誰待たれつ紹ろの羽織はおり

十八

ただ驚ろかれたのは身体からだの変化である。騒動のあつた明る朝あく、何かの必要うなに促うながされて、肋あばらの左右に横たえた手を、顔の所まで持つて来きようとすると、急に持主でも変つたように、自分の腕ながらまるで動かなかつた。人を煩わづらわす手数てかずを厭いとつて、無理に肘ひじを杖つえとして、手頸てくびから起しかけたはかけたが、わずか何寸かの距離を通して、宙に短かい弧線を描く努力と時間とは容易のものでなかつた。ようやく浮き上つた筋きんの力を利用して、高い方へ引くだけの精気に乏しいので、途中から断念して、再び元の位置にわが腕を落そうとすると、それがまた安くは落ちなかつた。無論そのままにして心を放せば、自然の重みでもとに倒れるだけの事ではあるが、その倒れる時の激動が、いかに全身に響き渡るかと考

えると、非常に恐ろしくなつて、ついに思い切る勇氣が出なかつた。余はおろす事も上げる事も、また半途に支える事もできない腕を意識しつつそのやりどころに窮した。ようやく傍はたのもの氣がついて、自分の手をわが手に添えて、無理のないように顔の所まで持つて来てくれて、歸りにもまた二つ腕をいっしよにしてやつと床とこの上まで戻した時には、どうしてこう自己が空虚になつたものか、我ながらほとんど想像がつかなかつた。後から考えて見て、あれは全く護ゴム護ふう風船せんに穴あが開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮がたちまちゆつという音と共に収縮したと一般の吐血だから、それでああ身体からだにこたへたのだらうと判断した。それにしても風船はただ縮ちぢまるだけである。不幸にして

余の皮は血液のほかには大きな長い骨をたくさんに包んでいた。その骨が――

余は生れてより以来この時ほど吾骨の硬さを自覚した事がない。その朝眼が覚めた時の第一の記憶は、実にわが全身に満ち渡る骨の痛みの声であった。そうしてその痛みが、宵に、酒を被つた勢いで、多数を相手に劇しい喧嘩を挑んだ末、さんざんに打ち据えられて、手も足も利かなくなつた時のごとくに吾を鈍く叩きこなしていた。砧きぬたに擣うたれた布は、こうもあろうかとまで考えた。それほど正体なくきめつけられ了つた状態を適当に形容するには、ぶちのめすと云う下等社会で用いる言葉が、ただ一つあるばかりである。少しでも身体を動かそうとすると、関節ふしぶしがみしみしと鳴

つた。

昨日まで狭い布団ふとんに劃かくされた余の天地は、急にまた狭くなつた。その布団のうち的一部分よりほかに出る能力を失つた今の余には、昨日まで狭く感ぜられた布団がさらに大きく見えた。余の世界と接触する点は、ここに至つてただ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなつた。——頭は無論枕に着いていた。

これほどに切りつめられた世界に住む事すら、昨夕ゆうべは許されそうに見えなかつたのにと、傍はたのものは心うちの中で余のために観じてくれたろう。何事も弁わきまえぬ余にさえそれが憐あわれであつた。ただ身の布団に触れる所のみがわが世界であるだけに、そうしてその触れる所が少しも変らないために、我と世界との関係は、非常に単

純であつた。全くスタチツク（静^{せい}）であつた。したがつて安全で

あつた。綿^{わた}を敷いた棺^{かん}の中に長く寝て、われ棺を出でず、人棺を

襲^{おそ}わざる亡^{もう}者の気分は——もし亡者に気分が有り得るならば、

——この時の余のそれと余りかけ隔^{へだ}つてはいなかつたろう。

しばらくすると、頭が麻痺^{しび}れ始めた。腰の骨が骨だけになつて

板の上に載^のせられているような気がした。足が重くなつた。かく

して社会的の危険から安全に保証された余^{いちにん}一人の狭い天地にも

また相應の苦しみができた。そうしてその苦痛^のを逃れるべく余は

一寸^{いっすん}のほかにさえ出る能力を持たなかつた。枕元にどんな人が

どうして坐^{すわ}っているか、まるで気がつかなかつた。余を看護する

ために、余の視線の届かぬ傍^{かたわ}らを占めた人々の姿は、余に取つて

神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰あおむけ向に寝たま
ま、身の及ばざるところに時々眼を走らした。そうして天てんじよう井
から釣つた長い氷ひようのう囊の糸をしばしば見つめた。その糸は冷た
い袋と共に、胃の上でぴくりぴくりと鋭どい脈を打っていた。

朝寒あささむや生きたる骨を動かさず

十九

余はこの心持をどう形容すべきかに迷う。

力を商あきないにする相撲すもうが、四つに組んで、かつきり合つた時、土

俵の真中に立つ彼等の姿は、存外静かに落ちついている。けれどもその腹は一分と経たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければやまない。そうして熱そうな汗の球が幾条となく背中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、この波とこの汗の辛うじて齎らす努力の結果である。静かなのは相剋する血と骨の、わずかに平均を得た象徴である。これを互殺の和という。二三十秒の現状を維持するに、彼等がどれほどの気魄を消耗せねばならぬかを思うとき、看る人は始めて残酷の感を起すだろう。

自活の計に追われる動物として、生を営む一点から見た人間は、まさにこの相撲のごとく苦しいものである。吾らは平和なる家庭

の主人として、少くとも衣食の満足を、吾らと吾らの妻子さいしとに与えんがために、この相撲に等しいほどの緊張に甘んじて、日々にちにち自己と世間との間に、互殺の平和を見出みいだそうと力めつとつつある。戸そ外とに出て笑うわが顔を鏡に映すならば、そうしてその笑いの中うちに殺さつ伐ぼつの氣きに充みちた我を見出すならば、さらにこの笑いに伴う恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、回えこう院いんのそれのように、一分いっぶん足たらずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生続かなければならないという苦しい事実に想おもい至るならば、我等は神経衰弱おちいに陥るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつつあるとまで言いたくなる。

かく単に自活自營の立場に立つて見渡した世の中はことごとく敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。もし彼对我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味において敵であるし、妻子もある意味において敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵になりつつある。疲れともやめえぬ戦いを持続しながら、然として独りその間に老ゆるものは、見惨みじめと評するよりほかに評しようがない。

古臭い愚痴ぐちを繰返すなどという声がしきりに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚痴を繰返すのは、しみじみそう感じたからばかりではない、しみじみそう感じた心持を、急に病気が来て顛覆くつがえしたからである。

血を吐いた余は土俵の上に仆たおれた相撲と同じ事であつた。自活のために戦う勇氣は無論、戦わねば死ぬという意識さえ持たなかつた。余はただ仰向けあおむに寝て、わずかな呼吸いきをあえてしながら、怖こわい世間を遠くに見た。病気が床の周圍ぐるりを屏風びょうぶのように取り巻いて、寒い心を暖かにした。

今までは手を打たなければ、わが下女さえ顔を出さなかつた。人に頼まなければ用は弁じなかつた。いくらしようと思あせつても、調ととのわない事が多かつた。それが病気になる、がらりと變つた。余は寝ていた。黙つて寝ていただけである。すると医者が来た。社員が来た。妻さいが来た。しまいには看護婦が二人来た。そうしてことごとく余の意志を働かさないうちに、ひとりでに来た。

「安心して療養せよ」と云う電報が満洲から、血を吐いた翌日に来た。思いがけない知己ちぎや朋友が代る代る枕まくらもと元もとに来た。あるものは鹿児島から来た。あるものは山形から来た。またあるものは眼の前に逼るせま結婚を延期して来た。余はこれらの人に、どうして来たか聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて来たか云つた。仰あおむけ向むかに寝た余は、天井を見つめながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住すみ悪にくいとのみ観じた世界にたちまち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰とうたせられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙いそがしい世が、これほどの手間と時間と親切をかけ、てくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病やまいに生き還かえると共に、

心に生き還つた。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手
間と時間と親切とを惜しまざる人々に謝した。そうして願わくは
善良な人間になりたいと考えた。そうしてこの幸福な考えをわれ
に打うちこわ壊す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。

馬。上。青。年。老。鏡。中。白。髮。新。

幸。生。天。子。国。願。作。太。平。民。

二十

ツルゲニエフ以上の芸術家として、有力なる方面の尊敬を新た
にしつつあるドストイェフスキーには、人の知るごとく、小供の

時分から癩癩てんかんの発作ほつきがあつた。われら日本人は癩癩と聞くと、ただ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾やまいとと称なえていた。この神聖なる疾に冒おかさされる時、あるいはその少し前に、ドストイェフスキーは普通の人が大音楽を聞いて始めて到いたり得るような一種微妙の快感に支配されたそうである。それは自己と外界との円満に調和した境地で、ちようど天体の端から、無限の空間に足を滑すべらして落ちるような心持だとか聞いた。「神聖なる疾」に罹かかつた事のない余は、不幸にしてこの年になるまで、そう云う趣おもむきに一瞬間も捕われた記憶をもたない。ただ大吐血後五六日——経たつか経たないうちに、時々一種の精神状態おちいに陥つた。それから毎日のように同じ状態を繰り返した。ついには

来ぬ先にそれを予期するようになった。そうして自分とは縁の遠いドストイエフスキーの享けたと云う不可解の歓喜をひそかに想像してみた。それを想像するか思い出すほどに、余の精神状態は尋常を飛び越えていたからである。ドクインセイの細かに書き残した驚くべき阿片の世界も余の連想に上った。けれども読者の心もく目を眩惑するに足る妖麗な彼の叙述が、鈍い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思うと、それを自分の精神状態に比較するのが急に厭になった。

余は当時十分と続けて人と話をする煩わしさを感じた。声となつて耳に響く空気の波が心に伝つて、平らかな気分をことさらに騒つかせるように覺えた。口を閉じて黄金なりという古い言葉を

思い出して、ただ仰向けあおむに寝ていた。ありがたい事に室へやの廂ひさしと、
 向うの三階の屋根の間に、青い空が見えた。その空が秋の露つゆに洗
 われつつしだいに高くなる時節であった。余は黙つてこの空を見
 つめるのを日課のようにした。何事もない、また何物もないこの
 大空は、その静かな影を傾むけてことごとく余の心に映じた。そ
 うして余の心にも何事もなかつた。また何物もなかつた。透明な
 二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に残るのは、
 とでも形容してよい気分であつた。

そのうち穏かな心すみの隅すみが、いつか薄く暈ぼかされて、そこを照らす
 意識の色が微かすかになつた。すると、ヴェイルに似た靄もやが軽く全面
 に向つて万まんべん遍なく展のびて来た。そうして総体の意識がどこもか

しこも稀薄きはくになった。それは普通の夢のように濃いものではなかつた。尋常の自覚のように混雑したものでもなかつた。またその中間よこたに横わる重い影でもなかつた。魂が身体からだを抜けると云つてはすでに語弊がある。霊が細かい神経こまの末端にまで行き亘わたつて、泥でできた肉体の内部を、軽く清くすると共に、官能の実覚はるから杳かに遠からしめた状態であつた。余は余の周囲に何事が起りつつあるかを自覚した。同時にその自覚が窺ようちよう窺ようちようとして地の臭においを帯びぬ一種特別のものであると云う事を知つた。床ゆかの下に水が廻つて、自然と畳が浮き出すように、余の心は己おのれの宿る身体と共に、蒲団ふとんから浮き上がった。より適当に云えば、腰と肩と頭に触れる堅い蒲団がどこかへ行つてしまつたのに、心と身体は元の位置に

安く漂ただよっていた。発作前ほっさせんに起るドストイエフスキーの歓喜は、
 瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭としても然しかるべき性質のもの
 のとか聞いている。余のそれはさように強烈のものではなかつた。
 むしろ恍惚こうこつとして幽かすかな趣おもむきを生活面の全部に軽くかつ深く印いんし
 去つたのみであつた。したがつて余にはドストイエフスキーの受
 けたような憂鬱ゆううつせい性の反動が来なかつた。余は朝からしばしばこ
 の状態に入いつた。午過ひるすぎにもよくこの蕩漾とうようを味あじわつた。そうして
 覚さめたときはいつでもその楽しい記憶を抱いだいて幸福の記念とした
 くらいであつた。

ドストイエフスキーの享うけ得えた境きよう界がいは、生理上彼の病やまいのま
 さに至らんとする予言である。生なを半なかに薄うすめた余の興致は、単に

貧血の結果であつたらしい。

仰臥人如唾。 默然見大空。

大空雲不動。 終日杳相同。

二十一

同じドストイエフスキーもまた死の門かどぐち口まで引き摺ずられながら、辛かろうじて後戻りをする事のできた幸福な人である。けれども彼の命を危あやめにかかつた災わざわいは、余の場合におけるがごとき悪あく辣らつな病氣ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云う器械の敵となつて、どんと心臓を打うち貫ぬかれようとしたのである。

彼は彼の倶楽部クラブで時事を談じた。やむなくんばただ一揆いつぎあるのみと叫んだ。そうして囚とらわれた。八カ月の長い間薄暗うすくらい獄舎の日光に浴したのち、彼は蒼空あおぞらの下もとに引き出されて、新たに刑壇の上に立った。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜しもに、襯衣シャツ一枚の裸姿はだかすがたとなつて、申渡もうしわたしの終るのを待った。そうして銃殺に処すの一句を突然として鼓膜こまくに受けた。「本当に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍かたわらに立つ同どうしゆ囚うに問うた言葉である。……白い手帛ハンケチを合図に振った。兵士は覘ねらいを定めた銃口つつぐちを下に伏せた。ドストイェフスキーはかくして法律の捏ね丸こめた熱い鉛なまりたまの丸を吞まずにすんだのである。その代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死からまた生に戻って、一時間と経たぬうちに三たび鋭い曲折を描いた。そうしてその三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。その変化だけでも驚くべき経験である。生きつつあると固く信ずるものが、突然これから五分のうちに死ななければならぬと云う時、すでに死ぬときまつてから、なお余る五分の命を提^{ひっさ}げて、まさに来るべき死を迎えながら、四分、三分、二分と意識しつつ進む時、さらに突き当ると思つた死が、たちまちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、——余のごとき神経質ではこの三象^{フエーゼス}面^面の一つにすら堪^たえ得まいと思う。現にドストイエフスキーと運命を同じくした同囚^{いちにん}の一人は、これがためにその場で気が狂つて

しまった。

それにもかかわらず、回復期に向つた余は、病牀びようしやうの上に寝ながら、しばしばドストイエフスキーの事を考えた。ことに彼が死の宣告から蘇よみがえつた最後の一幕を眼に浮べた。——寒い空、新しい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚のままふる顫えている彼の姿、——ことごとく鮮やかな想像の鏡に映つた。ひとりひと彼が死刑を免まぬかれたと自覚し得た咄嗟とつさの表情が、どうしても判然はつきり映らなかつた。しかも余はただこの咄嗟の表情が見たいばかりに、すべての画面を組み立てていたのである。

余は自然の手に罹かかつて死のうとした。現に少しの間死んでいた。後から当時の記憶を呼び起した上、なおところどころの穴へ、妻さい

から聞いた顛末てんまつを埋めて、始めて全くでき上る構図をふり返つて見ると、いわゆる慄然りっぜんと云う感じに打たれなければやまなかつた。その恐ろしさに比例して、九きゆうじん 仞じんに失つた命を一簣いつきに取り留める嬉しうれさはまた特別であつた。この死この生に伴う恐ろしさと嬉しさが紙の裏表のごとく重なつたため、余は連想上常にドストイェフスキーを思い出したのである。

「もし最後の一節を欠いたなら、余はけつして正気ではいられなかつたろう」と彼自身が物語っている。気が狂うほどの緊張を幸いに受けずとすんだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料はかり得ぬと云う方がむしろ適当かも知れぬ。それであればこそ、画が 竜りゆう 点てん 睛せいとも云うべき肝かん 心しんの刹那せつなの表情が、どう想像しても漠ぼくと

して眼の前に描き出せないのだろう。運命の擒きん縦しやうを感じずる点において、ドストイエフスキーと余とは、ほとんど詩と散文ほどの相違がある。

それにもかかわらず、余はしばしばドストイエフスキーを想像してやまなかつた。そうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣シヤツ一枚で顫ふるえている彼の姿とを、根氣よく描き去り描き来きたつてやまなかつた。

今はこの想像の鏡もいつとなく曇つて来た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に日にわれを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始し終じゆうわが傍かたわらにあるならば、——ドストイエフスキーは自己の幸福に対して、生しょう涯がい感謝する事を忘れぬ人であつた。

二十二

余はうとうとしながらいつの間にか夢に入った。すると鯉こいの跳はねる音でたちまち眼が覚さめた。

余が寝ている二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉がたくさんに飼かつてあつた。その鯉が五分に一度ぐらいは必ず高い音を立ててぱしやりと水を打つ。昼のうちでも折々は耳に入った。夜はことに甚はなはだしい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山もことごとく静まり返つた真中まなかに、余は絶えずこの音で眼を覚さました。

犬の眠りと云う英語を知ったのはいつの昔か忘れてしまつたが、犬の眠りと云う意味を实地に経験したのはこの頃が始めてであつた。余は犬の眠りのために夜よごと悩まされた。ようやく寝ついてありがたいと思う間もなく、すぐ眼が開あいて、まだ空は白まないだろうかと、幾いくたび度も暁あかつきを待ち侘わびた。床とこに縛しばりつけられた人の、しんとした夜半よなかに、ただ独ひとり生きてゐる長さは存外な長さである。——鯉いぎおいが勢よく水を切つた。自分の描いた波の上を叩たたく尾の音で、余は眼を覚ました。

へや室の中は夕暮よりもなお暗い光で照らされてゐた。天井から下がっている電気灯の珠たまは黒布くろぬので隙間なく掩おひがしてあつた。弱い光りはこの黒布の目を洩もれて、微かすかに八畳の室を射た。そうして

この薄暗い灯影ひかげに、真白な着物を着た人間が二人坐すわっていた。二人とも口を利きかなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝ひざの上へ手を置いて、互いの肩を並べたままじつとしていた。

黒い布で包んだ球を見たとき、余は紗しやで金箔きんぱくを巻いた弔旗ちようきの頭を思い出した。この喪章もしようと関係のある球の中から出る光線によつて、薄く照らされた白衣はくゐの看護婦は、静かなる点において、行儀の好い点において、幽霊ひなの雛ひなのように見えた。そうしてその雛は必要のあるたびに無言のまま必ず動いた。

余は声も出さなかつた。呼びもしなかつた。それでも余の寝ている位置に、少しの変化さえあれば彼等はきつと動いた。手を毛布つとのうちで、もじつかせても、心持肩を右から左へ揺ゆつても、頭

を——頭は眼が覚めるたびに必ず麻痺しびれていた。あるいは麻痺れるので眼が覚めるのかも知れなかった。——その頭を枕の上でいつすんず寸摺すらしても、あるいは足——足はよく寢覚ねざめの種となった。平生ふだんの癖で時々、片かた方かたを片方の上へ重ねて、そのままとろとろとなると、下になった方の骨が沢庵石たくわんいしでも載せられたように、みしみしと痛んで眼が覚めた。そうして余は必ず強い痛さと重たさを忍んで足の位置を変えなければならなかった。——これらのあらゆる場合に、わが変化に応じて、白い着物の動かない事はけっしてなかった。時にはわが動作を予期して、向うから動くと思われる場合もあった。時には手も足も頭も動かさないのに、眠りが尽きてふと眼を開けさえすれば、白い着物はすぐ顔そばの傍へ来

た。余には白い着物を着ている女の心持が少しも分らなかつた。けれども白い着物を着ている女は余の心を善く悟つた。そうして影の形に随うごとくに變化した。響の物に応ずるごとくに働らいた。黒い布の目から洩れる薄暗い光の下に、真白な着物を着た女が、わが肉体の先を越して、ひそひそと、しかも規則正しく、わが心のままに動くのは恐ろしいものであつた。

余はこの気味の悪い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸に映る室の天井を眺めた。そうして黒い布で包んだ電気灯の珠と、その黒い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて来た。

秋風鳴万木。
 山雨撼高楼。
 病骨稜如劍。
 一灯青欲愁。

二十三

余は好意の干乾ひからびた社会に存在する自分をはなはだぎごちなく
 感じた。

人が自分に対して相応の義務を尽くしてくれるのは無論ありがたい。けれども義務とは仕事に忠実なる意味で、人間を相手に取った言葉でも何でもない。したがって義務の結果に浴する自分は、ありがたいと思いなながらも、義務を果した先方に向って、感謝の

念を起し悪い。それが好意となると、相手の所作が一挙一動ことごとく自分を目的にして働いてくるので、活物の自分にその一挙一動がことごとく応える。そこに互を繋ぐ暖い糸があつて、器械的な世を頼母しく思わせる。電車に乗つて一区を瞬く間に走るよりも、人の背に負われて浅瀬を越した方が情が深い。

義務さえ素直には尽くして呉れる人のない世の中に、また自分の義務さえ碌に尽くしもしない世の中に、こんな贅沢を並べるのは過分である。そうとは知りながら余は好意の干乾びた社会に存在する自分を切にぎごちなく感じた。——或る人の書いたものの中に、余りせち辛い世間だから、自用车を節儉する格で、当分良心を質に入れたとあつたが、質に入れるのは固より一時の融

通を計る便宜べんぎに過ぎない。今の大多数は質に置くべき好意てんさえ天
 で持っているものが少なそうに見えた。いかに工面くめんがついても受
 出そうとは思えなかつた。とは悟りながらやはり好意の干乾びた
 社会に存在する自分をぎごちなく感じた。

今の青年は、筆を執とつても、口を開あいても、身を動かしても、
 ことごとく「自我の主張」を根本義にしている。それほど世の中
 は切りつめられたのである。それほど世の中は今の青年を虐待し
 ているのである。「自我の主張」を正面から承うけたまわれば、小憎こにくらしい
 申し分が多い。けれども彼等をしてこの「自我の主張」をあえて
 して憚はばかるところなきまでに押しつめたものは今の世間である。
 ことに今の経済事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊くくつ

たり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶はんもんが含まれている。

ニーチエは弱い男であった。多病な人であった。また孤独な書生であつた。そうしてザラツストラはかくのごとく叫んだのである。

こうは解釈するようなものの、依然として余は常に好意の干乾びた社会に存在する自分をぎごちなく感じた。自分が人に向つてぎごちなくふるまいつつあるにもかかわらず、自らみづかぎごちなく感じた。そうして病やまいに罹かかつた。そうして病の重い間、このぎごちなさをどこへか忘れた。

看護婦は五十グラムの粥かゆをコップの中に入れて、それを鯛味噌たいみそと混ぜ合あわして、一匙ひとさじずつ自分の口に運んでくれた。余は雀すずめの子からすか鳥の子のような心持がした。医師は病の遠ざかるに連れて、

ほとんど五日目ぐらいごとに、余のために食事の献立表こんだてひょうを作った。ある時は三通りも四通りも作つて、それを比較して一番病人に好きそうなものを撰えらんで、あとはそれぎり反故ほごにした。

医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば、報酬も受ける。ただで世話をしていない事はもちろんである。彼等をもつて、単に金銭を得るが故ゆえに、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器械的で、実みも蓋ふたもない話である。けれども彼等の義務の中うちに、半分の好意を溶とき込んで、それを病人の眼から透すかして見たら、彼等の所作しよさがどれほど尊たつとくなるか分らない。病人は彼等のもたらず一点の好意によつて、急に生きて来るからである。余は当時そう解釈して独ひとりで嬉うれしかった。そう解釈された

医師や看護婦も嬉しかろうと思う。

子供と違つて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文か
らできたように見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純
潔な感情を恣ほしいのままに吸収する場合が極めて少ない。本当に嬉しか
つた、本当にありがたかつた、本当に尊たつとかつた、生涯しょうがいに何
度思えるか、勘定かんじょうすれば幾いくばく何もない。たとい純潔でなくて
も、自分に活力を添えた当時のこの感情を、余はそのまま長く余
の心臓の真中まんなかに保存したいと願つてゐる。そうしてこの感情が遠
からず単に一片いっぺんの記憶と変化してしまひそうなのを切せつに恐れて
ゐる。——好意の干乾ひからびた社会に存在する自分をはなはだぎごち
なく感ずるからである。

天。下。自。多。事。
 衰。病。夢。顔。紅。
 残。存。吾。骨。貴。
 被。吹。天。下。風。
 送。鳥。天。無。尽。
 慎。勿。妄。磨。※。
 高。秋。悲。鬢。白。
 看。雲。道。不。窮。

二十四

小供のとき家に五六十幅の画えがあつた。ある時は床の間の前で、ある時は蔵の中で、またある時は虫干むしぼしの折に、余は交かわる交かわるそれを見た。そうして懸物かけものの前に独り蹲踞ひと うずくまつて、默然と時を過すのを楽たのしみとした。今でも玩具箱おもちゃばこを引繰ひつくり返したように色彩の乱調な芝居を見るよりも、自分の氣に入つた画はに対してはるいる方が遥

かに心持が好い。

画のうちでは彩色さいしきを使った南画なんがが一番面白かった。惜しい事に余の家の蔵幅ぞうふくにはその南画が少なかった。子供の事だから画の巧拙こうせつなどは無論分ろうはずはなかった。好き嫌いすききらと云ったところで、構図こうずの上に自分の氣に入った天然の色と形が表われていればそれで嬉うれしかったのである。

鑑識上の修養を積む機会をもたなかった余の趣味は、その後別段に新らしい変化を受けないで生長した。したがって山水によつて画を愛するの弊へいはあつたらうが、名前によつて画を論ずるの譏そしりも犯おかさずにすんだ。ちようど画を前後して余の嗜好しこうに上のぼつた詩と同じく、いかな大家の筆になつたものでも、いかに時代を食つ

たものでも、自分の気に入らないものはいつこう顧みる義理を感じなかつた。（余は漢詩の内容を三分して、いたくその一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしている。残る三分の一に対しては、好むべきか悪むべきかにくいずれとも意見を有していない。）

ある時、青くて丸い山を向うに控えた、また的てきれきと春に照る梅を庭に植えた、また柴門さいもんの真前まんまえを流れる小河を、垣に沿うてゆるめく緩く繞らした、家を見て——無論画絹えぎぬの上に——どうか生しょうが涯いに一遍で好いからこんな所に住んで見たいと、傍そばにいる友人に語つた。友人は余の真面目まじめな顔をしけじけ眺めて、君こんな所に住むと、どのくらい不便なものだか知つているかとさも気の毒そうに云つた。この友人は岩手いわてのものであつた。余はなるほどと

始めて自分の迂濶うかつを愧はずると共に、余の風流心に泥を塗った友人の實際的なのを悪んだ。

それは二十四五年も前の事であつた。その二十四五年の間に、余もやむをえず岩手出身の友人のようにしだいに實際的になつた。崖がけを降りて溪たにがわ川へ水を汲くみに行くよりも、台所へ水道を引く方が好くなつた。けれども南画に似た心持は時々夢を襲つた。ことに病氣になつて仰あおむけ向むに寝てからは、絶えず美しくしい雲と空が胸に描かれた。

すると小宮君が歌麿うたまろの錦にしき絵えを葉書に刷すつたのを送つてくれた。余はその色いろあ合あの長い間に自おのずと寂さびたくすみ方に見惚みとれて、眼を放さずそれを眺めていたが、ふと裏を返すと、私はこの画の

中にあるような人間に生れたいとか何とか、当時の自分の情調とは似ても似つかぬ事が書いてあつたので、こんなやにつこい色いろおとこ

男はだいきらい大嫌だ、おれは暖かな秋の色とその色の中から出る自然の香かが好きだと答えてくれと傍はたのものに頼んだ。ところが今度は小宮君が自身で枕元へ坐すわつて、自然も好いが人間の背景にある自然でなくつちやとか何とか病人に向つて古臭い説を吐はきかけるので、余は小宮君を捕つらまえて御前は青二才あおにさいだと罵ののしつた。——それくらい病中の余は自然を懐なつかしく思つていた。

空が空の底に沈み切つたように澄んだ。高い日が蒼あおい所を目の届くかぎり照らした。余はその射返いかえしの大地に浴あまねき内にしんとして独ひとり温ぬくもつた。そうして眼の前に群がる無数の赤蜻蛉あかとんぼを見

た。そうして日記に書いた。——「人よりも空、語よりも黙。：

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」

これは東京へ帰った以後の景色である。東京へ帰ったあともしばらくは、絶えず美くしい自然の画が、子供の時と同じように、余を支配していたのである。

秋露下南※。 黄花粲照顔。
欲行沿澗遠。 却得与雲還。

二十五

子供が来たから見てやれと妻が耳の傍へ口を着けて云う。身体

を動かす力がないので余は元の姿勢のままただ視線だけをその方に移すと、子供は枕を去る六尺ほどの所に坐っていた。

余の寝ている八畳に付いた床の間は、余の足の方にあつた。余の枕元は隣の間を仕切る襖ふすまで半塞ふすまなかぼさいであつた。余は左右に開かれた襖ふすまの間から敷居越しに余の子供を見たのである。

頭の上の方にいるものを室へやを隔てて見る視力が、不自然な努力を要するためか、そこに坐っている子供の姿は存外遠方に見えた。無理な一瞥いちべつの下もとに余の眸ひとみに映った顔は、逢おうたと記しるすよりもむしろ眺めたと書く方が適當なくらい離れていた。余はこの一瞥よりほかにまた子供の影を見なかつた。余の眸はすぐと自然の角度に復した。けれども余はこの一瞥の短きうちにすべてを見た。

子供は三人いた。十二から十、十から八つと順に一列になつて隣座敷の真中に並ばされていた。そうして三人ともに女であつた。彼等は未来の健康のため、一夏を茅が崎に過すべく、父母から命ぜられて、兄弟五人で昨日まで海辺を駆け廻つていたのである。父が危篤の報知によつて、親戚のものに伴れられて、わざわざ砂深い小松原を引き上げて、修善寺まで見舞に来たのである。

けれども危篤の何を意味しているかを知るには彼らはあまり小さ過ぎた。彼らは死と云う名前を覚えていた。けれども死の恐ろしさと怖さとは、彼らの若い額の奥に、いまだかつて影さえ宿さなかつた。死に捕えられた父の身体が、これからどう変化するか彼らには想像がでなかつた。父が死んだあとで自分らの運命に

どんな結果が来るか、彼らには無論考え得られなかった。彼らはただ人に伴われて父の病気を見舞うべく、父の旅先まで汽車に乗って来たのである。

彼らの顔にはこの会見が最後かも知れぬと云う愁うれいの表情がまるでなかった。彼らは親子の哀別以上に無邪気な顔をもっていた。そうしていろいろ人のいる中に、三人特別な席に並んで坐らせられて、厳肅な空氣にじつと行儀よく取りすます窮屈を、切なく感じてゐるらしく思われた。

余はただ一いちべつ瞥ひの努力に彼らを見ただけであつた。そうして病やまいを解し得ぬ可憐な小さいものを、わざわざ遠くまで引張り出して、殊しゆしよう勝かちに枕元に坐らせておくのをかえつて残酷に思つた。妻さいを

呼んで、せつかく来たものだから、そこいらを見物させてやれと命じた。もしその時の余に、あるいはこれが親子の見納めになるかも知れないと云う懸念けねんがあつたならば、余はもう少ししみじみ彼らの姿を見守つたかも知れなかつた。しかし余は医師や傍はたものが余に対して抱いていたような危険を余の病の上に自らみずか感じていながつたのである。

子供はじきに東京へ歸つた。一週間ほどしてから、彼らは各めいめ々いに見舞状を書いて、それを一つ封に入れて、余の宿に届けた。

十二になる筆子ふでこのは、四角な字を入れた整わない候そうろうぶん文で、

「御祖母おばばさま様が雨がふつても風がふいても毎日毎日一日もかかさず御しやか様へ御詣おまいりを遊ばす御百度おひやくどをなされ御父様の御病氣一

日も早く御全快を祈り遊ばされまた高田の御伯母様おんおばどこかの御宮へか御詣り遊ばすとのことごきそろうに御座候ふさ、きよみ、むめの三人の連中は毎日猫の墓へ水をとりかえ花を差し上げて早く御父様の全快を御祈りに居り候」とあつた。十とおになる恒子つねこのは尋常であつた。八やっになるえい子のは全く片仮名だけで書いてあつた。字を埋めて読みやすくすると、「御父様の御病気はいかがでございますか、私は無事に暮しておりますから御安心なさいませ。御父様も私の事を思わずに御病気を早く直して早く御帰りなさいませ。私は毎日休まずに学校へ行つて居ります。また御母様によろしく」と云うのである。

余は日記のページ一頁を寝ながら割さいて、それに、留守の中うちはおとな

しく御祖母様おばばさまの云う事を聞かなくてはいけない、今についでであつた時修善寺しゆぜんじの御土産おみやげを届けてやるからと書いて、すぐ郵便で妻さいに出さした。子供は余が東京へ帰つてからも、平気で遊んでゐる。修善寺の土産みやげはもう壊してしまつたろう。彼等が大きくなつたとき父のこの文を読む機会がもしあつたなら、彼等ははたしてどんな感じがするだろう。

傷。心。秋。已。到。　　嘔。血。骨。猶。存。
 病。起。期。何。日。　　夕。陽。還。一。村。

二十六

五十グラムと云うと日本の二勺半にしか当たらない。ただそれだけの飲料で、この身体からだを終日も持ち応こたえていたかと思えば、自分ながら気の毒でもあるし、可愛かわいらしくもある。また馬鹿らしくもある。

余は五十グラムの葛湯くずゆを恭うやうやくしく飲んだ。そうして左右の腕あしに朝あさ夕ゆう二回あさゆうずつの注射を受けた。腕は両方とも針の痕あとで埋うまつていた。医師は余に今日はどつちの腕にするかと聞いた。余はどつちにもしたくなかった。薬液を皿に溶いたり、それを注射器に吸い込ましたり、針ていねいを丁寧ぬぐに拭ぬぐつたり、針の先に泡こまのように細こまかい薬を吹かして眺めたりする注射の準備ははなはだ物奇麗ものぎれいで心持が好いけれども、その針を腕にぐさと刺して、そこへ無理に薬

を注射するのは不愉快でたまらなかつた。余は医師に全体その鳶と色びいろの液は何だと聞いた。森もりなり成さんはブンベルンとかブンメルンとか答えて、遠慮なく余の腕を痛がらせた。

やがて日に二回の注射が一回に減じた。その一回もまたしばらくすると廃やめになつた。そうして葛湯の分量が少しずつ増して来た。同時に口の中が執しゅうね拗ねばく粘り始めた。爽さわやかな飲料で絶えず舌と顎あごと咽喉のどを洗つていなくてはいたたまれなかつた。余は医師に氷を請求した。医師は固い片かけらが滑すべつて胃の腑ふに落ち込む危険を恐れた。余は天てんじよう井を眺めながら、腹膜炎を患わずらつた廿歳はたちの昔を思い出した。その時は病氣に障さわるとかで、すべての飲物を禁ぜられていた。ただ冷水で含嗽うがいをするだけの自由を医師から得たの

で、余は一時間のうちに、何度となく含嗽をさせて貰った。そうしてそのつど人に知れないように、そつと含嗽の水を幾分かずつ胃の中に飲み下して、やっと熬いりつくような渴かわきを紛まらしていた。

昔はかりごとの計はかりごとを繰り返す勇氣のなかつた余は、
こうちゆう 口 中うるおを潤すための

氷を齒で噛かみ砕くだいては、正直に残らず吐き出した。その代り日に

数回平野水ひらのすいを一口ずつ飲まして貰う事にした。平野水がくんく

んと音を立てるような勢で、食道から胃へ落ちて行く時の心持は

痛快であつた。けれども咽喉を通り越すや否やすぐとまた飲みた

くなつた。余は夜半よなかにしばしば看護婦から平野水コップを洋盃つに注いで

貰つて、それをありがたそうに飲んだ當時をよく記憶している。

渴かつはしだいに歇やんだ。そうして渴よりも恐ろしい餓ひもじさが腹の

中を荒して歩くようになった。余は寝ながら美しい食膳しよくぜんを何通りなんとおとなく想像で拵こしらえて、それを眼の前に並べて楽しんでた。そればかりではない、同じ献立こんだてを何人前ととのも調べておいて、多数の朋友にそれを想像で食わして喜こんだ。今考えると普通のものの嬉しがるような食物くいものはちつともなかつた。こう云う自分にすらあまりありがたくはない御膳おぜんばかりを眼の前に浮べていたのである。

森成さんがもう葛湯くずゆも厭あきたらうと云つて、わざわざ東京から米を取り寄せて重湯おもゆを作つてくれた時は、重湯を生れて始めて啜すする余には大いな期待があつた。けれども一口飲んで始めてその不ま味のずに驚ろいた余は、それぎり重湯というものを近づけなかつ

た。その代りカジノビスケットを一片貰った折の嬉しさはいまだに忘れられない。わざわざ看護婦を医師の室までやって、特に礼を述べたくらいである。

やがて粥を許された。その旨さはただの記憶となつて冷やかに残っているだけだから実感としては今思い出せないが、こんな旨いものが世にあるかと疑いつつ舌を鳴らしたのは確かである。それからオートミールが来た。ソーダビスケットが来た。余はすべてをありがたく食つた。そうして、より多く食いたいと云う事を日課のように繰り返して森成さんに訴えた。森成さんはしまいに余の病床に近づくのを恐れた。東君はわざわざ妻の所へ行って、先生はあんなもつともな顔をしている癖に、子供のよう

じゆうくいのもの
終食物の話ばかりしておかしいと告げた。

はらわたしたた
腸に春滴るや粥の味

二十七

オイツケンまむきは精神生活と云う事を真向に主張する学者である。

学者の習慣として、自己の説を唱となうる前には、あらゆる他のイズムを打破する必要を感じずるものと見えて、彼は彼のいわゆる精神生活を新たならしむるため、その用意として、現代生活に影響を与うる在来からの処生上の主義に一も二もなく非難を加えた。自然主義もやられる、社会主義も叩たたかれる。すべての主義が彼の眼

から見て存在の権利を失ったかのごとくに説き去られた時、彼は始めて精神生活の四字を拈ねん出しゅつした。そうして精神生活の特色は自由である、自由であると連呼れんこした。

試みに彼に向つて自由なる精神生活とはどんな生活かと問えば、たんでき端的にこんなものだとはけつして答えない。ただ立派な言葉を秩序よく並べ立てる。むずかしそうな理窟りくつを蜿えん蜒えんと幾重いくえにも重ねて行く。そこに学者らしい手際てぎわはあるかも知れないが、とぐるの中に巻き込まれる素しろ人ろうとは茫然ぼんやりしてしまふだけである。

しばらく哲学者の言葉を平民に解るように翻訳して見ると、オイツケンのいわゆる自由なる精神生活とは、こんなものではなからうか。——我々は普通衣食のために働らいている。衣食のため

の仕事は消極的である。換言すると、自分の好悪撰択こうおを許さない強制的の苦しみを含んでいる。そう云う風にほかから圧おしつけられた仕事では精神生活とは名づけられない。いやしくも精神的に生活しようと思うなら、義務なきところに向つて自ら進みむ積極みずかのものではなければならない。束縛によらずして、己おのれ一個の意志で自由に営む生活でなければならない。こう解釈した時、誰も彼の精神生活を評してつまらないとは云うまい。コムトは倦アンニユイ怠イをもつて社会の進歩を促うながす原因と見たくらいである。倦怠の極やむをえずして仕事を見つげ出すよりも、内に抑おさえがたき或るものが蟠わだかまつて、じつと持もち応こたえられない活力を、自然の勢から生命の波動として描びようしゆつ出きたし来る方が實際実みの入いつた生き法かたと云わな

ければなるまい。舞踏でも音楽でも詩歌しいかでも、すべて芸術の価値はここに存していると評しても差さしつか支えない。

けれども学者オイツケンの頭の中で纏まとめ上げた精神生活が、現に事実となつて世の中に存在し得るや否やに至つては自おのずから別問題である。彼オイツケン自身が純一無雜に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても分ぶんみょう明な話ではないか。間斷なきこの種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早くすでに職業なき閑人として存在しなければならぬはずである。

豆腐屋が氣に向いた朝だけ石臼を回して、心の機はずまないときはけつして豆を挽ひかなかつたなら商しょうばい買ばいにはならない。さらに進んで、己おのれの好いた人だけに豆腐を売つて、いけ好かない客をこ

とごとく謝絶したらなおの事商買にはならない。すべての職業が職業として成立するためには、店に公平の灯を点けなければならぬ。公平と云う美しそうな徳義上の言葉を裏から言い直すと、器械的と云う醜い本体を有しているに過ぎない。一分の遅速なく発着する汽車の生活と、いわゆる精神的な生活とは、正に両極に位する性質のものでなければならぬ。そうして普通の人は十が十までこの両端を七分三分とか六分四分とかに交ぜ合わせて自己に便宜なようにまた世間に都合の好いように（すなわち職業に忠実なるように）生活すべく天から余儀なくされている。これが常態である。たまたま芸術の好きなものが、好きな芸術を職業とするような場合ですら、その芸術が職業となる瞬間において、真の精

神生活はすでに汚けがされてしまうのは当然である。芸術家としての彼は己おのれに篤あつき作品を自然の気乗りで作り上げようとするに反して、職業家としての彼は評判のよきもの、売うれ高だかの多いものを公おおけにしなくてはならぬからである。

すでに個人の性格及び教育次第で融通の利きかなくなりそうなオイツケンのいわゆる自由なる精神生活は、現今の社会組織の上から見ても、これほど応用の範囲の狭いものになる。それを一般に行き亘わたつて実行のできる大主義のごとくに説き去る彼は、学者の通弊として統一病かかに罹つたのだと酷評を加えてもよいが、たまたま文芸を好んで文芸を職業としながら、同時に職業としての文芸を忌いんでいる余のごときものの注意を呼び起して、その批評心を

刺戟しげきする力は充分ある。大患おほいに罹かかつた余は、親の厄介あやまになつた子供の時以来久しぶりくわいで始めてこの精神生活の光に浴した。けれどもそれはわずか一二月の中であつた。病やまいが癒なおるに伴つれ、自己がしだいに実世間に押し出されるに伴れ、こう云う議論を公けにして得意なオイツケンうらを羨うらやまずにはいられなくなつて来た。

二十八

学校を出た当時小石川のある寺に下宿をしていた事がある。その和おし尚しょうは内職に身の上判断をやるので、薄暗い玄関の次の間に、算木さんぎと筮ぜい竹ちくを見るのが常であつた。固もとより看板をかけたの

おもてむき
 公 表 な 商 買 でなかつたせいか、占を頼に来るものは多く
 て日に四五人、少ない時はまるで筮竹を揉む音さえ聞えない夜も
 あつた。易断に重きを置かない余は、固よりこの道において和
 尚と無縁の姿であつたから、ただ折々襖越しに、和尚の、そりや
 当人の望み通りにした方が好うがすななどと云う縁談に関する助
 言を耳に挟さむくらしいなもので、面と向き合つては互に何も語
 らずに久しく過ぎた。

ある時何かのついでに、話がつい人相とか方位とか云う和尚の
 縄張り内に摺り込んだので、冗談半分私の未来はどうでしょうと
 聞いて見たら、和尚は眼を据えて余の顔をじつと眺めた後で、大
 して悪い事ありませんなどと答えた。大して悪い事もないと云う

のは、大して好い事もないと云つたも同然で、すなわち御前の運命は平凡だと宣告したようなものである。余は仕方がないから黙つていた。すると和尚が、あなたは親の死目には逢えませんねと云つた。余はそうですかと答えた。すると今度はあなたは西へ西へと行く相があると云つた。余はまたそうですかと答えた。最後に和尚は、早く顚あごの下へ髻ひげを生やして、地面を買つて居宅うちを御建てなさいと勧めた。余は地面を買つて居宅を建て得る身分なら何も君の所に厄介になつちやいないと答えたかつた。けれども顚の下やしきの髻と、地面居宅とはどんな関係があるか知れたかつたので、それだけちよつと聞き返して見た。すると和尚は真面目まじめな顔をして、あなたの顔を半分に割ると上の方が長くつて、下の方が短か

過ぎる。したがって落ちつかない。だから早く鬚を生やして上
 下の釣つりあい合を取るようになれば、顔の居いすわ坐りがよくなつて動かな
 くなりますと答えた。余は余の顔の雑ぞうさく作に向つて加えられたこ
 の物理的もしくは美学的の批判が、優に余の未来の運命を支配す
 るかのごとく容易に説き去つた和尚を少しおかしく感じた。そう
 してなるほどと答えた。

一年ならずして余は松山に行った。それからまた熊本に移つた。
 熊本からまた倫ロンドン敦に向つた。和尚の云つた通り西へ西へと赴おもむい
 たのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。その時は同じ東
 京におりながら、つい臨終の席には侍はんべらなかつた。父の死んだ電
 報を東京から受け取つたのは、熊本にいる頃の事であつた。これ

で見ると、親の死目に逢あえないと云つた和尚の言葉もどうかこう
 かの的中あごしている。ただ顛あごの髻ひげに至つてはその時から今こん日に至る
 まで、寧ねいじつ日じつなく剃そり続けに剃つてゐるから、地面ぢめんと居宅やしきがはた
 して髻げと共にわが手てに入るかどうかいまだに判然はんぜんせずいにいた。

ところが修善寺しゆぜんじで病氣びやうきをして寝つくや否や、頬ほがざらざらし
 始めた。それが五六日すると一本一本に撮つまめるようになった。ま
 たしばらくすると、頬ほから顛あごが隙間すきまなく隠れるようになった。和お
 尚しようの助じよこん言ごんは十七八年ぶりで始めて役に立ちそうな気色けしきに髻げは
 延びて来た。妻さいはいつそ御生おはやしなすつたら好いでしようと云つ
 た。余も半分その氣になつて、しきりにその辺なを撫なで廻まわしていた。
 ところが幾日いくかとなく洗くいも櫛くしけずりもしない髪かみが、膏あぶらと垢あかで余の頭

を埋め^{うず}尽くそうとする汚^{むさ}苦しさに堪^たえられなくなつて、ある日床屋を呼んで、不充分ながら寝たまま頭に手を入れて顔に髪^{かみ}剃^{そり}を当てた。その時地面と居宅の持主たるべき資格をまた奇麗^{きれい}に失つてしまつた。傍^{はた}のものは若くなつた若くなつたと云つてしきりに囃^{はや}し立てた。独り^{ひとり}妻だけはおやすつかり剃^すつておしまいになつたんですかと云つて、少し残り惜しそうな顔をした。妻は夫の病気が本復した上にも、なお地面と居宅が欲しかったのである。余といえども、髯を落さなければ地面と居宅がきつと手に入^いると保証されるならば、あの顛はそのままに保存しておいたはずである。その後髯^ごは始終剃つた。朝早く床の上に起き直つて、向うの三階の屋根と吾^{わが}室^{へや}の障^{しょう}子^じの間にわずかばかり見える山の頂^{いた}を眺^た

めるたびに、わが頬の潔しじやくよく剃り落してある滑なめらかさを撫なで廻し
ては嬉うれしがった。地面と居宅は当分断念したか、または老後の楽
しみにあとあとまで取っておくつもりだったと見える。

客夢回時一鳥鳴。夜来山雨曉来晴。

孤峯頂上孤松色。早映紅暎鬱々明。

二十九

修善寺しゆぜんじが村の名で兼かねて寺の名であると云う事は、行かぬ前か
ら疾とくに承知していた。しかしその寺で鐘の代りに太鼓を叩たたこうと
はかつて想おもい至らなかつた。それを始めて聞いたのはいつの頃で

あつたか全く忘れてしまった。ただ今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん——どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病気を憶い出す。

余は去年の病気と共に、新らしい天井と、新らしい床の間

にかけて大島將軍の從軍の詩を憶い出す。そうしてその詩を朝か

ら晩までに何遍となく読み返した當時を明らさまに憶い出す。新

らしい天井と、新らしい床の間と、新らしい柱と、新らし過ぎて

開閉あけたての不自由な障子しょうじは、今でも眼の前にありありと浮べる事

ができるが、朝から晩までに何遍となく読み返した大島將軍の詩

は、読んでは忘れ、読んでは忘れして、今では白壁しろかべのように白

い絹の上を、どこまでも同じ幅で走って、尾頭おかしらともにぷつりと

折れてしまふ黒い線を認めるだけである。句に至つては、始めの
 劍戟けんげきという二字よりほか憶い出せない。

余は余の鼓膜こまくの上に、想像の太鼓がどん——どんと響くたびに、
 すべてこれらのものを憶い出す。これらのものの中に、じつと仰あ
 向おもいて、尻の痛さを紛まぎらしつつ、のつそつ夜明を待ち侘わびたその
 当時を回顧すると、修禪寺しゆぜんじの太鼓の音ねは、一種云うべからざる
 連想をもつて、いつでも余の耳の底に卒然と鳴り渡る。

その太鼓は最も無風流な最も殺風景な音を出して、前後を切り
 捨てた上、中間だけを、自暴やけに夜陰に向つて擲たきつけるように、
 ぶつきら棒な鳴り方をした。そうして、一つどんと素気そっけなく鳴る
 と共にぱたりと留つた。余は耳を峙そばだてた。一度静まつた夜の空

気は容易に動こうとはしなかった。やや久らくして、今のは錯覚ではなからうかと思ひ直す頃に、また一つどんと鳴った。そうして愛想あいそのない音は、水に落ちた石のように、急に夜の中に消えたり、しんとした表に何の活動も伝えなかつた。寝られない余は、待ち伏せをする兵士のごとく次の音ねの至るを思いつめて待った。その次の音はやはり容易には来なかつた。ようやくのこと第一第二と同じく極めて乾かわび切きつた響かが——響とは云いい悪にくい。黒い空気の中に、突然無遠慮な点をどつと打つて直筆すくを隠したような音が、余の耳じ朶だを叩たたいて去ある後とで、余はつくづく夜を長いものに観みじた。

もつとも夜は長くなる頃であつた。暑さもしだいに過ぎて、雨

の降る日はセルに羽織を重ねるか、思い切つて朝から袷あわせを着るか
しなければ、肌寒はださむを防ぐ便たよりとならなかつた時節である。山の端
に落ち込む日は、常の短かい日よりもなおの事短かく昼を端折はしお
つて、灯ひは容易に点ついた。そうして夜は中々明けなかつた。余はじ
りじりと昼に食い入る夜長を夜ごとに恐れた。眼が開くときつと
夜であつた。これから何時間ぐらいこうしてしんと夜の中に生き
ながら埋うずもつている事かと思うと、我ながらわが病気に堪たえられ
なかつた。新らしい天井と、新らしい柱と、新らしい障子を見つ
めるに堪えなかつた。真白な絹に書いた大きな字の懸物かけものには最
も堪えなかつた。ああ早く夜が明けてくれればいいのにと思つた。

修禅寺の太鼓はこの時にどんと鳴るのである。そうしてことさ

らに余を待ち遠しがらせるごとく疎まばらな間隔を取って、暗い夜を
 ぼつりぼつりと縫い始める。それが五分と経たち七分と経つうちに、
 しだいに調子づいて、ついに夕立の雨あまだれ滴しげよりも繁せまく逼せまつて来る
 変化は、余から云うともう日の出に間もないと云う報知であつた。
 太鼓を打ち切つてしばらくののち後に、看護婦がやつと起きて室へやの廊
 下の所だけ雨戸を開けてくれるのは何よりも嬉しかった。外はい
 つでも薄暗く見えた。

修善寺に行つて、寺の太鼓を余ほど精密に研究したものはある
 まい。その結果として余は今でも時々どんと云う余音よいんのないぶつ
 切つたような響を余の鼓膜の上に錯覚のごとく受ける。そうして
 一種云うべからざる心持を繰り返している。

夢繞星※。夜分形影暗灯愁。
旗亭病近修禪寺。一※。

三十

山を分けて谷一面の百合を飽くまで眺めようと心にきめた翌あくる
日ひから床の上にたお仆れた。想像はその時限りなく咲き続く白い花
をごいし基石のように点々と見た。それをおぐら小暗く包もうとする緑の奥に
は、重い香かが沈んで、風に揺られる折々を待つほどに、葉は息苦
しく重なり合った。——この間宿の客が山から取つて来てへい瓶びんに挿さ
した一輪の白さと大きさと香かおりから推して、余は有るまじき広々と

した画えを頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云うからし唐菖蒲しょうぶの事だと、その唐菖蒲を床に活かしておいた時、始めてかいし芥舟しゅうくん君から教わつて、それではまるで野の百合の感じが違ふようだがと話し合つたひとつきまえ一月前も思い出された。聖書と関係の薄い余にさえ、ひおうぎ檜扇を熱带的に派は出でに仕立てたような唐菖蒲は、深い沈んだ趣おもむきを表わすにはあまり強過ぎるとしか思われなかつた。唐菖蒲はどうでもよい。余が想像に描いた幽かすかな花は、一輪も見る機会のないうちに立秋に入いつた。百合は露つゆと共に摧くだけた。

人は病むもののために裏の山に入いつて、ここかしこから手の届いく幾いく茎くきの草花を折つて来た。裏の山は余の室へやから廊下伝いにす

ぐ^{のほ}上^{たより}る便のあるくらい近かつた。障^{しょうじ}子^しさえ明けておけば、寝ながら縁^{えん}側^{がわ}と欄間^{らんま}の間を埋^{うづ}める一部分^{うづ}を鼻^なの先に眺^{なが}める事もできた。その一部分は岩と草と、岩の裾^{すそ}を縫^ううて迂^{うかい}回^{かい}して上^{のほ}る小径^{こみち}とから成り立っていた。余は余のために山に上^{のほ}るものの姿が、縁の高さを辞して欄間の高さに達するまでに、一遍影を隠して、また反対の位地から現われて、ついに余の視線のほか^{のほ}に没してしまふのを大いなる変化のごとくに眺めた。そうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下^{くだ}つて来るのを疎^{うと}い眼で眺めた。彼らは必ず粗^{あら}い縞^{しま}の貸浴衣^{かしゆかた}を着て、日の照る時は手拭^{てぬぐい}で頬^ほ冠^{おかむ}りをしていた。岨^そ道^{みち}を行くべきものとも思われぬその姿が、花を抱^{かか}えて岩^{かか}の傍^{そば}にぬつと現われると、一種芝居にでも有りそうな感

じを病人に与えるくらい釣合つりあいがおかしかった。

彼等の採とつて来てくれるものは色彩の極きわめて乏しい野生の秋草であつた。

ある日しんとした真昼に、長い薄すすきが畳たたに伏さるやうに活けてあつたら、いづどこから来たとも知れない 蟋きりぎりす 蟀すずめがたつた一つ、おとなしく中ほどに宿とまつていた。その時薄は虫の重みで撓しないそうに見えた。そうして袋戸ふくろどに張つた新らしい銀の上に映る幾分かの緑が、暈ぼかしたやうに淡くかつ不分明ふぶんみように、眸ひとみを誘うので、なおさら運動の感覚を刺戟しげきした。

薄は大概ちぢすぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花おみなえしさえ眺めるにはあまり色素が足りなかつた。ようやく秋草の淋さみしさを物憂ものうく思い

出した時、始めて蜀紅葵しよっこうあおいとか云う燃えるような赤い花はなびら弁を見た。留守居の婆さんに銭ぜにをやつて、もつと折らせると云つたら、銭は要いりません、花は預かり物だから上げられませんと断わつたそうである。余はその話を聞いて、どんな所に花が咲いていて、どんな婆さんがどんな顔をして花の番をしているか、見たくてたまらなかつた。蜀紅葵の花はなびら弁は燃えながら、翌日あくるひ散つてしまつた。

桂川かつらがわの岸伝いに行くといくらでも咲いていると云うコスモスも時々病室を照らした。コスモスはすべての中うちで最も単簡たんかんでかつ長く持つた。余はその薄くて規則正しい花片と、空くうに浮んだように超然と取り合わぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子ひがしに

似ていると評した。なぜですかと聞いたものがあつた。範頼のりよりの墓守はかもりの作つたと云う菊を分けて貰つて来たのはそれからよほどの事である。墓守は鉢に植えた菊を貸して上げようかと云つたそうである。この墓守の顔も見たかつた。しまいには畠山はたけやまの城址しろあとからあげびと云うものを取つて来て瓶へいに挿はさんだ。それは色の褪さめた茄子なすの色をしていた。そうしてその一つを鳥つが啄ついて空う洞つろにしていた。——瓶びんに挿さす草と花がしだいに変わるうちに気節はようやく深い秋に入いつた。

日似三春永。心随野水空。
 床頭花一片。閑落小眠中。

若い時兄を二人失つた。二人とも長い間床とこについていたから、死んだ時はいずれも苦しみ抜いた病やまいの影を肉の上に刻きざんでいた。けれどもその長い間に延びた髪と髯ひげは、死んだ後あとまでも漆うるしのように黒くかつ濃かつた。髪はそれほどでもないが、剃そる事のできないで不本意らしく爺々汚じじむさそうに生えた髯ひげに至つては、見るから憐あわれであつた。余は一人の兄の太く逞たくましい髯の色をいまだに記憶している。死ぬ頃の彼の顔がいかにも氣の毒なくらい瘠やせ衰おとろえて小さく見えるのに引き易かえて、髯だけは健康な壯者しのいきおいを凌しのぐ勢おおいで延びて来た一種の対照を、氣味悪くまた情なさけなく感じたためでもある。

大患に罹^かつて生か死かと騒がれる余に、幾日かの怪しき時間は、生とも死とも片づかぬ空裏^{くうり}に過ぎた。存亡の領域がやや明かになつた頃、まず吾^{わが}存在を確めたいと云う願から、とりあえず鏡を取つてわが顔を照らして見た。すると何年か前に世を去つた兄の面^{おも}影^{もかげ}が、卒然として冷かな鏡の裏を掠^{かす}めて去つた。骨ばかり意地悪く高く残つた頬、人間らしい暖^{あたたかみ}味^{あじ}を失つた蒼^{あお}く黄色い皮、落ち込んで動く余裕のない眼、それから無遠慮に延びた髪と髯、——どう見ても兄の記念であつた。

ただ兄の髪と髯が死ぬまで漆^{うるし}のように黒かつたのかかわらず、余のそれらにはいつの間にか銀の筋が疎^{まば}らに交つていた。考えて見ると兄は白髪^{しらが}の生える前に死んだのである。死ぬとすればその

方が屑いせぎよいかも知れない。白髪びんに鬢びんや頬ほをぽつぽつ冒まされながら、まだ生き延くふうびる工夫くふうに余念よねんのない余は、今を盛りの年頃に容赦ようじやなく世を捨てて逝ゆく壮者くわに比くらべると、何だかきまりが悪いほど未練みれんらしかつた。鏡かがみに映るわが表情へいじやうのうちには、無論むろんはかないと云う心持こころもちもあつたが、死しに損そくなつたと云う恥はじも少しは交まじつていた。また「ヴァージニバス・ピュエリスク」の中に、人はいくら年を取つても、少年の時と同じような性情せいじやうを失うわれないものだおもと書いてあつたのを、なるほどと首肯うなずいて読よんだ当時おとこを憶おもい出して、ただその当時に立ち戻かへりたいような氣きもした。

「ヴァージニバス・ピュエリスク」の著者しやくしやは、長い病苦びやうこに責せめられながらも、よくその快活くわいかつの性情せいじやうを終しゆう焉えんまで持もち続つけたから、

嘘うそは云わない男である。けれども惜しい事に髪かみの黒くろいうちに死しんでしまった。もし彼かれが生いきて六十七ろくにじゅうしちの高たか齡ねいに達たっしたら、あるいはこうは云いい切きれなかつたろうと思おもえば、思おもわれない事こともない。自分自分が二十にじゅうの時とき、三十さんじゅうの人ひとを見みれば大だい変へんに懸けん隔かくがあるように思おもいながら、いつか三十さんじゅうが来きると、二十にじゅうの昔むかしと同おなじ気き分ぶんな事ことが分わつたり、わが三十さんじゅうの時とき、四十しじゅうの人ひとに接せつすると、非常ひじょうな差さ違ちがいを認めめながら、四十しじゅうに達たっして三十さんじゅうの過か去そをふり返かへれば、依然いぜんとして同おなじ性せい情じやうに活くわきつつある自己じこを悟さとつたりするので、スチーヴンソンの言葉ことばももつともと受うけて、今日けふまで世よを経へたようなもの、外部がいぶから萌もして来きる老ろう顔がんの徵しる候けいを、幾いく茎けいかの白しろ髪かみに認めめて、健康けんこうの常じやう時じとは心意こころの趣おもむきを異ことにする病びやうり裡らの鏡かがみに臨まんだ刹せつ那なの感情かんじやうには、若わ

い影はさらに射さなかつたからである。

白髪に強いられて、思い切りよく老の敷居を跨いでしまおうか、白髪を隠して、なお若い街巷に徘徊しようか、——そこまでは鏡を見た瞬間には考えなかつた。また考える必要のないまでに、病める余は若い人々を遠くに見た。病気に罹る前、ある友人と会食したら、その友人が短かく刈つた余の揉上を眺めて、そこから白髪に冒されるのを苦にしてだんだん上の方へ剃り上げるのではないかと聞いた。その時の余にはこう聞かれるだけの色気は充分あつた。けれども病に罹つた余は、白髪を看板にして事をしたいくらいまでに諦めよく落ちついていた。

病の癒えた今日、日の余は、病中の余を引き延ばした心に生きて

いるのだろうか、または友人と食卓についた病びようき前ぜんの若さに立ち戻っているだろうか。はたしてスチーヴンソンの云った通りを歩く気だろうか、または中年に死んだ彼の言葉を否定してようやく老境に進むつもりだろうか。——白髪と人生の間に迷うものは若い人たちから見たらおかしいに違ない。けれども彼等若い人達にもやがて墓と浮世の間に立つて去就を決しかねる時期が来るだろう。

桃。花。馬。上。少。年。時。 笑。拋。銀。鞍。払。柳。枝。
 緑。水。至。今。迢。遞。去。 月。明。來。照。鬢。如。糸。

初めはただ漠然ぼくぜんと空を見て寝ていた。それからしばらくしていつ帰れるのだろうと思ひ出した。ある時はすぐにも帰りたいような心持がした。けれども床の上に起き直る氣力すらないものが、どうして汽車に揺られて半日の遠きを行くに堪え得ようかと考え、帰りたとい念ずる自分がかなり馬鹿氣て見えた。したがつて傍はたのものに自分はいつ帰れるかと問とい糺ただした事もなかつた。同時に秋は幾度の昼夜を巻いて、わが心の前を過ぎた。空はしだいに高くかつ蒼あおくわが上を掩おおひ始めた。

もう動かしても大事なかろうと云う頃になつて、東京から別に二人の医者を迎えてその意見を確めたら、今二週間の後のちにと云う

挨拶あいさつであつた。挨拶があつた翌あくるひ日から余は自分の寝ている地
 と、寝ている室へやを見捨るのが急に惜しくなつた。約束の二週間が
 なるべくゆつくり廻転するようにと糞ねがつた。かつて英国にいた頃、
 精一杯せいいつぱい英国を悪にくんだ事がある。それはハイネが英国を悪にくんだご
 とく因業いんごうに英国を悪にくんだのである。けれども立つ間際まぎわになつて、
 知らぬ人間の渦うずを巻いて流れている倫敦ロンドンの海を見渡したら、彼
 らを包む鳶色とびいろの空氣の奥に、余の呼吸に適する一種の瓦斯ガスが含
 まれているような気がし出した。余は空を仰いで町の真中まなかに佇たたず
 んだ。二週間の後この地を去るべき今の余も、病む軀からだを横よこえて、
 床とこの上に独り佇ひとずまざるを得なかつた。余は特に余のために造つ
 て貰つた高さ一尺五寸ほどの偉大な藁蒲団わらぶとんに佇たたずんだ。静かな

庭の寂寞せきばくを破る鯉こいの水を切る音に佇たずんだ。朝露あさつゆに濡ぬれた屋や根瓦ねがわらの上を遠おちこち近ちかと尾を揺うごかし歩あく鵲せきれい鳩いに佇たずんだ。枕元まくらもとの花か瓶へいにも佇たずんだ。廊下らうげのすぐ下をちよろちよろと流れる水みづの音ねにも佇たずんだ。かくわが身を繞めぐる多くのものものにていかい徊わしつつ、予定よの通り二週間の過ぎ去るのを待まちった。

その二週間は待ち遠いながゆさもなく、またあつけない不足ふそくもなく普通の二週間のごとくに来て、尋常じんじょうの二週間のごとくに去いった。そうして雨の濛も々もと降る暁あけぼのを最後の記念として与たまへた。暗くらい空を透すかして、余は雨かと聞いたら、人は雨だと答こへた。

人は余を運搬うんぱんする目的をもつて、一種妙こなものものを拵こらえて、それそれを座敷ざしきの中うちに昇かき入いれた。長さは六尺もあつたらう、幅はわず

か二尺に足りないくらい狭かつた。その一部は畳を離れて一尺ほどの高さまで上に反り返るそように工夫してあつた。そうして全部を白い布ぬので捲まいた。余は抱かれて、この高く反つた前方に背を託して、平たい方に足を長く横たえた時、これは葬式だなど思った。生きたものに葬式と云う言葉は穩当でないが、この白い布で包んだ寝台ねだいとも寝棺ねがんとも片のつかないものの上に横になつた人は、生きながら葬とむらられるとしか余には受け取れなかつた。余は口の中で、第二の葬式と云う言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ずやつて貰う葬式を、余だけはどうしても二返へん執行しなければすまないと思つたからである。

昇かかれて室へやを出るときは平たいらであつたが、階はしご子段だんを降りる際きわに

は、台が傾いて、急に輿こしから落ちそうになった。玄関に来ると同
 宿の浴客よくかくが大勢並んで、左右から白い輿こしを目送もくそうしていた。い
 ずれも葬式の時のように静かに控えていた。余の寝台はその間を
 通り抜けて、雨の降る庇ひさしの外に担かつぎ出された。外にも見物人はた
 くさんいた。やがて輿こしを豎たてに馬車の中に渡して、前後相對する席
 と席とで支えた。あらかじめ寸法を取って拵こしらえたので、輿こしはき
 つしりと旨うまく馬車の中に納った。馬は降る中を動き出した。余は
 寝ながら幌ほろを打つ雨の音を聞いた。そうして、御者台ぎよしゃだいと幌の間
 に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の断片をありが
 たく拝した。竹藪たけやぶの色、柿紅葉かきもみじ、芋いもの葉、權垣むくげがき、熟した
 稲の香か、すべてを見るたびに、なるほど今はこんなもの有るべ

き季節であると、生れ返ったように憶い出しては嬉しがった。さらに進んでわが帰るべき所には、いかなる新らしい天地が、寝ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構えているだろうかと想像して独りひと楽しんだ。同時に昨日きのうまでていかい徊したわらぶ藁もとん鵲せきれいも秋草もこい鯉も小河もごとごとく消えてしまった。

万事休時一息回。余生豈忍比残灰。

風過古澗秋声起。日落幽篁暝色来。

漫道山中三月滞。

帰期勿後黄花節。恐有羈魂夢旧苔。

※。

正月を病院でした経験は 生涯しょうがいにたった一遍いっぺんしかない。

松飾りの影が眼先に散らつくほど暮が押しつまった頃、余は始めてこの珍らしい経験を目前に控えた自分を異様に考え出した。同時にその考かんがえが単に頭だけに働らいて、毫ごうも心臓の鼓動に響を伝えなかつたのを不思議に思った。

余は白い寢床ベッドの上に寝ては、自分と病院と来るべき春とをかくのごとくいっしょに結びつける運命の酔すいきよう興きようさ加減かへんを懇ろねんろに商量ようりようした。けれども起き直つて机に向つたり、膳ぜんに着いたりする折は、もうここが我家わがいえだと云う気分きぶんに心を任まかして少しも怪しまなかつた。それで歳は暮れても春は逼せまつても別に感慨と云うほ

どのものは浮ばなかつた。余はそれほど長く病院にいて、それほど親しく患者の生活に根をおろしたからである。

いよいよ大晦日おおみそかが来た時、余は小さい松を二本買って、それを自分の病室の入口に立てようかと思つた。しかし松を支えるために釘くぎを打ち込んで美しい柱きずに創きずをつけるのも悪いと思つてやめにした。看護婦が表へ出て梅でも買って参りましようと思つたら買って貰う事にした。

この看護婦は修善寺しゆぜんじ以来余が病院を出るまで半年はんねんの間始しじゆ終余うの傍そばに付き切りに附ついていた女である。余はことさらに彼

の本名を呼んで町井石子嬢まちいししじよう町井石子嬢と云つていた。時々間違まちがえて苗字みょうじと名前を顛倒てんどうして、石井町子嬢とも呼んだ。する

と看護婦は首を傾げながらそう改めた方が好いようでございますねと云った。しまいには遠慮がなくなつて、とうとう鼬いたちと云う渾あ名だなをつけてやった。ある時何かのついでに、時に御前の顔は何かに似ているよと云つたら、どうせ碌ろくなものに似ているのじゃございますまいと答えたので、およそ人間として何かに似ている以上は、まず動物にきまつている。ほかに似ようたつて容易に似られる訳のものじゃないと言つて聞かせると、そりや植物に似ちや大變ですと絶ぜつきよう叫こゝろして以来、とうとう鼬ときまつてしまつたのである。

鼬の町井さんはやがて紅白の梅を二枝提さげて帰つて来た。白い方を蔵ぞうたく沢の竹の画えの前に挿さして、紅あかい方は太たけづつい竹筒の中に投

げ込んだなり、袋戸ふくろどの上に置いた。この間人から貰った支那水仙もくるくると曲つて延びた葉の間から、白い香かをしきりに放つた。町井さんは、もうだいぶん病気がよくおなりだから、明日あしたはきつと御雑煮おぞうにが祝えるに違ないと云つて余を慰めた。

除夜じよやの夢は例年の通り枕の上に落ちた。こう云う大患かかに罹つたあげく、病院の人となつて幾つの月を重ねた末、雑煮までここで祝うのかと考えると、頭の中にはアイロニーと云う羅馬字ローマじが明らかに綴つづられて見える。それにもかかわらず、感に堪たえぬ趣おもむきは少しも胸を刺さずに、四十四年の春おのは自おのずから南向の縁から明け放れた。そうして町井さんの予言の通り形かたばかりとは云いながら、小さいひとときれ一切の餅もちが元日らしく病人ひとみの眸ひとみに映じた。余はこの一椀の

雑煮に自家頭上を照らすある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜずに、小さな餅きれの片を平凡にかつ一口に、ぐいと食つてしまった。

二月の末になつて、病室前の梅がちらほら咲き出す頃、余は医師ゆるしの許を得て、再び広い世界の人となつた。ふり返つて見ると、入院中に、余と運命のいっかく一角を同じくしながら、ついに広い世界を見る機会が来ないで亡なくなつた人は少なくない。ある北ほくこく国こくの患者は入院以後病勢がしだいに募つるので、附つきそ添いの息子むすこが心配して、大晦日おおみそかの夜よになつて、無理に郷里に連れて帰つたら、汽車がまだ先へ着かないうちに途中で死んでしまつた。一ひと間ま置いて隣りの人は自分で死期を自覚して、諦あきらめてしまえば死ぬと云う事

は何でもないものだと言つて、気の毒なほどおとなしい往生を遂げた。向うの外れはずにいた潰瘍患者かいようかんじやの高い咳嗽せきが日ごとひに薄らいで行くので、大方落ちついたのだらうと思つて町井さんに尋ねて見ると、衰弱の結果いつの間にか死んでいた。そうかと思つと、癌がんで見込のない病人の癖に、から景気をつけて、回診の時に医師の顔を見るや否や、すぐ起き直つて尻しりを捲まくるといふのがあつた。附添の女房を蹴けたり打ぶつたりするので、女房が洗面所へ来て泣いているのを、看護婦が見兼ねみかねて慰めていましたと町井さんが話した事も覚えてゐる。ある食道しょくどう狭せう窄せうの患者は病院には這入はいつてゐるようなものの迷いに迷い抜いて、灸点師きゅうてんしを連れて来て灸を据すえたり、海草かいそうを採とつて来て煎せんじて飲んだりして、ひたすら不

治の癌がんしやう症なほを癒なほそうとしていた。……

余はこれらの人と、一つ屋根の下に寝て、一つまかない賄まかないの給仕を受け
て、同じく一つ春を迎えたのである。退院後一カ月余よの今こんにち日に
なつて、過去をひとつかみ一攫ひとつかみにして、眼の前に並べて見ると、アイロ
ニーの一語はますます鮮やかに頭の中に拈ねんしゆつ出しゆつされる。そうし
ていつの間にかこのアイロニーに一種の実感が伴つて、両ふたつのも
のが互たがひに纏てんめん綿めんして来た。鼬すいの町井さんも、梅の花も、支那水仙
も、雑ぞう煮にも、——あらゆる尋常の景趣はことごとく消えたのに、
ただ当時の自分と今の自分との対照だけがはつきりと残るためだ
ろうか。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年6月26日公開

2011年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思い出す事など

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>